

# 埋もれし人々に光を

水戸藩士殉難百五十年記念誌



灰爪の丘供養塔



会津城（鶴ヶ城）天守閣





## 発刊にあたり

水戸藩士殉難百五十年  
記念事業実行委員会委員長

岡見 円礼

明治維新百五十年の節目に当たり、水戸市・水戸市教育委員会・幕末維新水戸有志を偲ぶ会の後援のもと、水戸藩士殉難恩光碑保存会が当委員会を立ち上げ、その記念事業の一環として、記念誌「埋もれし人々に光を」を発行できますこと、万感胸に迫る思いです。

執筆に際しては「市川勢の軌跡」や「大志」等を執筆された常磐短期大学特任教授、市村眞一先生にお願いしました。

振り返りますと、明治以降諸生党は逆賊・姦党の汚名のもとひっそりと息を殺している状態でした。今から十年前、高橋丈夫議員が議会で「天狗・諸生平等に扱う」という答弁を頂いてから、水戸市長始め関係各位の方々は大変良く努力して下さいました。

天狗も諸生も、もとは弘道館で机を並べた学友です。同じ水戸藩の親戚同士です。共に言うべきことは言っても、第一に正しい歴史を後世に伝えること、第二に歴史的反省から同じ過ちを二度と繰り返さないことが大切です。そのよすがとして、この記念誌発刊をうれしく思います。





ごあいさつ

水戸市長

高橋 靖

この度、水戸藩士殉難百五十年記念事業記念誌『埋もれし人々に光を』が刊行されますことを心からお喜び申し上げます。

幕末維新期における水戸藩では、藩を二分する抗争により、数多くの尊い命が失われ、近代以降も様々なわだかまりを残すことになりました。

水戸殉難者恩光碑保存会の皆様におかれましては、日頃から幕末維新期に関する調査研究や啓発事業を精力的に展開されておりますことに、あらためて敬意を表します。そして、この度、松山戦争をはじめとする水戸藩の軌跡を一書に纏めていただいたことは、明治改元から百五十年の節目の年にふさわしい事業であると思っております。

本市におきましても、様々な明治維新百五十年記念事業を展開してきたところであり、これらの事業によって再認識した史実を、正しく後世に伝えてまいりたいと考えております。

結びに、本書の発行にご尽力いただきました市村眞一先生をはじめ関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、尊い命を捧げられた先人たちのご冥福をお祈り申し上げまして、あいさついたします。



ごあいさつ

水戸市教育委員会教育長

本多 清峰

明治維新百五十年記念の年に当たり「水戸藩士殉難百五十年記念事業記念誌」が発刊されますことを、心よりお喜び申し上げます。

幕末維新期における水戸藩は、第九代藩主徳川斉昭が藩政改革を行うとともに、幕政にも積極的な言動をもって重きを成し、会沢正志斎や藤田東湖の思想が幕末の志士に大きな影響を与えるなど、歴史において大きな役割を果たしました。

一方、藩内では、立場や考え方の違いから藩士同士が激しく対立し、戦いの中で多くの血が流れるという悲劇も生じました。

私たちは、そのような水戸藩の光と影の両面に目を向けるとともに、学校教育や社会教育を通じて、その内容を次世代に確実に伝える責務があると考えます。本書が広く活用され、その一助となることを切に願います。

結びに、記念誌発行にご尽力いただきました関係各位に心より感謝申し上げます。





ごあいさつ

水戸殉難者恩光碑保存会会長

大森 信明

水戸藩土殉難百五十周年記念事業の一環としてこの記念誌を企画しました。発行には水戸市教育委員会のご協力をいただき、編集には、幕末の水戸藩に造詣が深く、「市川勢の軌跡」や「大志」等の関連書籍を執筆されております常磐短期大学特任教授、市村眞一先生にお願いしました。市村先生には、諸生党・天狗党どちらにも偏らない内容にすることをお願いし、期待通りの仕上がりになりました。

これは「水戸藩の歴史を後世に偏見なく伝えたい」私たちの願いによるものです。明治以後の水戸の歴史観は、戊辰戦争の勝者を正当化し、敗者を極端に悪者にした偏見に満ちたものでした。恩光碑保存会はこの偏見を正す活動をして参りましたが、まだ道程半ばです。

私たちはこの記念誌が、幕末の歴史を後世に正しく伝える一助となりますことを心より願い、発刊の挨拶と致します。



ごあいさつ

幕末維新水戸有志を偲ぶ会会長

中山 義雄

朝日影豊栄のぼるひのものと

やまとの国のはるのあけぼの 佐久良東雄

平成十年、NHK大河ドラマ「徳川慶喜」の放映に呼応して、当時の水戸市助役宮嶋敬夫氏が呼びかけ、水戸市教育委員会教育長の海野千秀先生が「幕末維新水戸有志を偲ぶ会」と命名して当会が発足しました。当初は六百名に近い会員がおりましたが、現在は約百二十名になっております。

本会の使命は、歴史を語る「史談会」としてまた、水戸市民として天狗・諸生の溝をうめるべく努力することにあります。換言すれば水戸光圀公の「彰考往来」（昔のことを明らかにし、未来を考える）の精神を進めることにあります。さすれば、水戸に春のあけぼのが見られることと考えております。

彰考往来は互文であり、意味的には彰往考来、過去のこと（往）をあきらかにし（彰）未来（来）たるを考える（考）



## はじめに

昨年二〇一八年は明治維新から百五十年の節目の年にあたり、全国で、これを記念するさまざまな事業が行われました。現在の水戸市と東京都を本拠とした水戸藩の幕末は、のちに「天下の魁」と称されながら実際は藩内が多難な時代だったため、華やかな百五十年記念事業を行う環境にはなかったのです。水戸藩の場合、この時代は藩内抗争が続き、多くの有為な人材を失ってしまいました。したがって、多くの人々を慰霊することが水戸藩士殉難百五十年記念事業実行委員会の中心事業となったのは当然のことといえます。今回、発刊した冊子も維新時に藩内抗争で殉難（国難のために身を犠牲にすること）した人々を偲び、改めて歴史に埋もれてしまった史実を発掘し、後世に伝えることを目的に執筆しました。水戸藩の実態に目を向け、論語にある「温故知新」という言葉の意味するものを考える機会になることを期待します。そして、国難（水戸藩で殉難した）に散った人々を衷心より慰霊します。

常磐短期大学特任教授 市村 眞一

## 目次

第一章 水戸藩の内部抗争	
第一節 史館動揺	8
第二節 藩主擁立問題	9
第三節 人事面の対立	10
第四節 斉昭の改革と失脚	12
第五節 斉昭の謀略と寅寿の陰謀	17
第六節 東湖の死と寅寿の処刑	20
第七節 天狗党の挙兵	21
第八節 諸生党の支配	22
第二章 戊辰戦争と水戸藩	
第一節 本圀寺勢と天狗党の復権	25
第二節 市川勢の軌跡	27
第三節 ほかの諸生党の動向	53
第四節 函館出兵と廃藩置県	58
協賛社芳名簿	61
協賛者芳名簿	62



# 第一章 水戸藩の内部抗争

## 第一節 史館動揺

立原翠軒と弟子の藤田幽谷の大日本史編さんをめぐる対立がエスカレートしたのが、史館動揺といわれている。

翠軒は天明六（一七八六）年、四十三歳で彰考館総裁となり、享和三（一八〇三）年に辞任するまで十七年間、総裁としてそれまで停滞気味だった大日本史の編さんに尽力した。門人には小宮山楓軒、木村謙次、藤田幽谷、青山延子など俊英が集まった。

一方、水戸の古着屋の二男に生まれた幽谷は、幼い時から学問を好み、十一歳で翠軒の門に入ると、すぐに頭角を現し、二年後には実力が認められ、翠軒の推薦により彰考館で学ぶことが許された。勉学に励んだ幽谷は、気性が激しく、先輩に対して自説を曲げずに主張することから、理論的対立が感情的な対立になることも多かった。やがて、師の翠軒と対立することになる。

翠軒は、彰考館総裁になると、光圀が明暦三（一六五七）年に着手し、総力を挙げて取り組んだ史書の編さんの遅れを取り戻そうと、完成を十年後に定め、「志表」編さんに力を注いだ。光圀の時代に本紀がまとまる。光圀は元禄十三（一七〇〇）年暮れ、西山荘において七十三歳で亡くなるが、生前、未完成の列伝を気にかけてながら、功をあせって後世の笑いを受けることのないようじっくり取り組むよう関係者に申し伝えたという。正徳五（一七一五）年、史書名が「大日本史」と定まり、翌享保元（一七一六）年、安積澹泊に本紀・列伝の論贊撰

考館を去った。これを史館動揺と呼ぶ。

翠軒が辞職した翌月、「大日本史」は「史稿」と改められ、論贊の削除も文化六（一八〇九）年に決まり、すべて藤田派の勝利に終わり、立原派は敗北した。注目すべきは、論贊の削除が決まった年に改名したはずの書目が元の「大日本史」で勅許を得ていることだ。名分論をもって「大日本史」という書名を激しく批判した幽谷が、なぜ「大日本史」を使用することを認めたのか。納得できない判断と考えるが、書名に異を唱えたのが政治的パフォーマンスだったとしたならば理解できよう。そうすると、二人の対立は感情的要因や学問、思想上の問題というよりむしろ政治的対立の色合いが濃いついことにならうか。

内藤耻叟は、その著「水戸小史」のなかで「享和三年二月四日遂に立原萬（翠軒）に致仕を命じ、五日議を定めて十三志を作るに決す。高橋・藤田・川口を以て総裁のことは行はしむ。是より立原は永く廢物となり。復出ることあたはず。是に於いて立原と同志者皆出て閑職につく。独り高橋・藤田の論大に行はる。是より立原翠軒が門人皆心に不平を懐くを免れず。後日両党の相争ふものは是より萌芽せり」と書いている。立原と藤田の対立が、のちの天狗・諸生の対立のきっかけとなったと、内藤は指摘した。天狗は、下級・中級藩士を中心とした改革派であり、諸生は、中級・上級藩士主体の保守派だ。また、それぞれの立場に協力した多くの農民、商人、神官、医師などさまざまな分野の領民がいたことも忘れてはならない。つまり、両派の対立は、藩士のみならず領民も巻き込んだ水戸藩全体の深刻な対立だった。

文が命じられた。享保五（一七二〇）年、水戸藩は幕府に未完成ながら体裁の整った「大日本史」を献上した。その後の停滞期を経て、翠軒が彰考館総裁に就くと、編さん事業を活性化させる。ただ、この時期の水戸藩は財政事情が厳しく、翠軒は三年後に「志表」編さんを止め、本紀列伝の出版で編さん事業を終了する方針を示した。

この方針に猛反発したのが幽谷だ。豊田天功が、のちに二人の対立の原因にあげたのは、大日本史という書名だ。すでに藩内で定着していた書名について、幽谷は「水戸家の私書に朝廷の許可を得ないで国名をつけることは、朝廷を蔑ろにするだけでなく、光圀公の意に背くことになる」と名分論で批判。書名を「史稿」と変えるべきと主張した。加えて高橋広備が本紀列伝から論贊を削除すべきと指摘。理由にあげたのは、論贊は祖宗の得失を論じるものであり、中国の史書なら理解できるが、革命のない日本にはなじまないというもの。立原派は、この指摘に対して「光圀公の遺志を継いだ（三代藩主）綱條公が、光圀公の尊意を体任した安積澹泊に命じて作成させたもので、紀伝の本意は論贊があつてこそ理解できるもの」と反論した。

翠軒が事業終了の方針を示したことに對して、幽谷や同調する学者たちは途中で終わるべきでなく志表の編さんも行うべきと反発した。藩主治紀も幽谷らの意見を支持したため、師弟の関係は完全に破綻した。享和三年一月、藩主の「志表のないことは光圀の意向でなく、幽谷に補修を行わせるので協力せよ」との命令が城中で翠軒に伝達され、翠軒は翌月辞職させられた。プライドを傷つけられた翠軒の思いは想像に難くない。この辞職に伴い、翠軒を師と仰ぐ学者たちが次々と彰

## 第二節 藩主擁立問題

彰考館内の対立が、政治色を明確にしたのが藩主擁立問題だ。八代藩主斉脩は十一代將軍家斉の娘峯姫と結婚したが、子供ができず、病弱だったこともあり、結婚十年ごろから後継問題が藩内で話題となった。改革派は、血筋を重んじる立場から、斉脩の弟斉昭を推し、保守派の多くは將軍家斉の子で御三卿の清水家を継いだ恒之丞を推し、互いに譲らなかつた。結局、斉脩の死後まもなく遺書が見つかり、そこに後継者として斉昭を指名したことが記されていたことから、斉昭が次期藩主に決まった。

この問題を取り上げた文献は、吉田令世の「水の一すじ」、会沢正志斎の「己丑備忘録」、藤田東湖の「常陸帯」「回天詩史」などあるが、いずれも改革派の立場で書かれたもので、保守派のものは見当たらない。そこで、「水の一すじ」をもとに問題の経緯を検証してみることにする。

文政六（一八二三）年ごろ、峯姫の父、將軍家斉は自分の子供のなから水戸家に養子を出したいと峯姫に打診したという。すでに家斉は子供を御三家、御三卿、大名の養子に出している。將軍の意向は、第二十子で御三卿清水家を継いでいる恒之丞だった。この噂話が現実味を帯びてきたのは文政十一（一八二八）年。峯姫が義弟の斉昭の娘賢姫を養女にし、恒之丞を迎えて水戸家を継がせようという具体的な話が出てきたからだ。財政が苦しく、幕府の援助に頼っていた藩政を再建する方策を模索していた藩上層部（保守派）は、願ってもいない機会として、この話を実現しようと考えた。しかし、幽谷の継嗣東湖



をはじめ会沢正志斎、彰考館総裁青山拙斎ら改革派は反対する。理由は、水戸家の血統が途絶えること。斉昭の娘を養女にして血統が維持できるようにみえるが、それでは女系になり、「正胤」がないときに認められるもので、「正胤」を差し置いて女系にすることは許されることではない。ここでいう「正胤」は斉昭だ。幽谷らは、斉昭こそ後継にふさわしいと名分論を主張した。保守派は、実利主義を展開し、双方譲らなかつた。その間、斉脩の病状は悪化した。

実は、斉脩は身近で世話をする近習番の岡井蓮亭に対して斉昭を養子にしたい心境を他言無用と語っていたようだ。斉脩が公表できなかったのは、実母の浄性院と斉昭の実母瑛想院が不仲だったことが影響しているとの話がある。そこからは、病弱だった斉脩の小心さや、優しさが感じられる。斉昭擁立の先頭に立っていた幽谷が文政九（一八二六）年に亡くなると、その遺志を継いだ東湖を中心に、改革派は結束して運動に励む。

それ以上に、積極的に動いたのは保守派だった。老中水野忠成を金銭で抱き込み、亀作村（現在の常陸太田市）出身で水戸藩の勝手方勤めに抜擢され、五百石を給された富豪の大久保今助を使って斉昭の悪口雑言を言いふらせた。これに危機感を抱いた改革派は、実力行動に出た。「南上」だ。幕府に禁じられた行為だが、それを無視して東湖、正志斎ら約四十人は無届で江戸に向かった。頭首は、一万石の家老山野辺家の長子義観であり、幽谷の門人ではないが武田耕雲斎らも参加した。江戸では、吉田が中心となり、青山、江戸通事立原杏所らが賛同。東湖らと連動して動く。立原杏所は、翠軒の長男で絵師として著

武田耕雲斎が使番、鈴木宜尊が奥祐筆、山野辺義観が執政見習、杉山復堂が寺社役など、改革派が昇進する人事を行った。また、郡奉行に新たに選ばれた東湖、会沢、吉成信貞、川瀬教徳の四人は改革派であり、保守派の友部好正も選ばれたが、彼は斉昭擁立派だった。だから五人はすべて斉昭擁立派。ほかに田丸直諒、山口徳正はもともと郡奉行だったが、文政年間に罷免され、閑職にあったものを復帰させた。領内の七郡奉行が全員、斉昭擁立派で占めたわけだ。そこに斉昭の藩政改革を進める強い意思が感じられる。彰考館で名を馳せた東湖と会沢を、学問の世界から政治の世界に異動させたのも斉昭の識見だろう。学者として有能だった彼らは、藩政でも力量を発揮する。斉昭の人材を見る目は、長い部屋住みの時代に培ってきたといえよう。

次の年、斉昭は七郡制陣屋詰めを廃止、四郡制に合理化し、かつ郡役所を地方から水戸城下に集約することで、郡役所の効率化と組織的な活性化を図った。四郡の奉行は、東湖、吉成、川瀬に石河幹忠が選ばれた。

ただ、改革派を登用する一方で、藩の主要なポストといえる執政は、山野辺（見習）を除くと全員が保守派で占めていた。いかに斉昭が自分を擁立した藩士を抜擢したとはいえ、そのほとんどが中下級藩士であり、彼らをいきなり重役にまで取り立てることは難しかった。保守派の多くの上級藩士は、初代藩主頼房時代から水戸藩に仕えてきた重臣であり、それを一気に能力主義に切り替えるほど革命的発想は斉昭にはなかつた。ある意味、保守的な側面を持っていた。その結果、保守派と改革派のバランスのとれた人事を行ったといえよう。天保元年

名だが、翠軒から生前「幽谷は許せないが、東湖は優れた人物だから遠慮せず付き合え」と言い聞かせられていたという逸話が残っている。少し遅れて金子孫二郎、戸田忠敞らも江戸に到着すると、東湖らは支藩守山藩を訪ねた。青山は、斉脩から他藩より養子を迎える考えのないことを記した親書を得ていたので、それを持って守山藩主松平頼誠と水戸藩付家老中山備後守を訪ねた。その翌日、文政十二年十月四日夜、斉脩は死去した。三十三歳だった。

死去後、斉脩の遺書三通が見つかり、一通に「自分が世を去ったら、敬三郎（斉昭）殿を養子とし、国政を譲りたい」と書いてあったことから、中山を通じて幕府に斉昭後継を願ひ出て、許可された。その遺書は現存せず、内容ができすぎとの指摘もあるが、真偽は不明だ。ともあれ九代藩主斉昭が誕生した。ときに二十九歳。

藩主擁立問題は、保守派と改革派の対立には違いないが、保守派から友部好正、村田正定なども参加しており、学派の対立がそのまま反映したとはいえない。

### 第三節 人事面の対立

斉昭は、藩主に就任すると直ちに藩政改革を断行する。まず行ったのは人事。文政十二年十二月、斉脩死後まもなく水戸の家老赤松重興、榊原照昌らを罷免したほか、彼らの腹心も処罰した。大久保今助も含まれていた。一方、東湖や正志斎など「南上」に及んだ改革派も違法性を問われ、処分されたが、形式上のことで、まもなく復職している。

翌天保元（一八三〇）年三月から四月にかけて、戸田が江戸通事に、

に参政から執政に昇格した朝比奈泰然や、水戸から江戸の執政になった興津克邁など保守派だ。そのなかでも筆頭にあげられる附家老の中山家は二万五千石を有する別格の存在であり、保守派の後ろ盾となっていただけに、斉昭は部屋住み時代から快く思っていなかったようだ。保守派の重臣を降格させることはしなかったが、中山家を藩内で大名的存在と認めた「別格」を止め、一般藩士と同じ知行所に改めた。これは中山家の独立性を否定するものであり、附家老とはいえ、藩士の一員にすぎないことを意味する。このときの当主は、六代藩主治保の実弟の信敬で、水戸藩から独立して新たな藩を起こそうと動いていたときだけに、斉昭の処置は許せない行為だったろう。その後は、斉昭と対立を深めていくことになる。中山家が願ひを叶えるのは、維新時のことで、松岡藩となる。中山家の「別格」が廃止されたことに喜んだのは山野辺家だ。一万石の執政見習の山野辺義観は、重臣の家柄ながら、歴代当主が中山家に押さえつけられてきた思いがあり、重臣のなかで一人斉昭擁立派として動いたのは、中山家に対する反感があったといわれている。もちろん、山野辺に改革派を支持する論理思考もあったのだろうが、感情面、あるいは組織面での不満が背景にあつたとの見方は否定できない。

斉昭はバランスのとれた人事を行ったといったが、保守派にしてみれば、東湖や会沢など下級藩士を抜擢する人事には不満だったろう。斉昭の進める藩政改革に否定的な立場を崩さなかつたのも、人事に対する不満からとみるべきだろう。藩政を牛耳る重臣らにとって斉昭の「封事の上呈」推奨も許せない行為だった。「封事の上呈」は、藩士が



藩政に意見を述べることで、改革派は敏感に反応した。重臣らは、下級藩士が自分たちを無視して藩主に意見具申できることは認められな  
いと反発したが、改革派の藩士たちは次々と意見を述べた。東湖をはじめ、会沢、吉成、豊田天功ら優秀な人材が藩政改革論を提示した。  
保守派では小宮山楓軒が上呈した程度で、ほかに目立つものはない。東湖は「改革を進めるためには、執政に逆らうこともやむを得ない」と言い切っている。この言葉は、重臣の存在を否定するものであり、極めて不快だったろう。このころ、東湖は改革派を「天狗」と呼び、保守派を「俗論派」と称した。かつて、斉昭擁立に動いた保守派も、次第に改革派から離れ、保守派に戻っていく。

藩政の実務面を掌握し、藩政改革（天保の改革）に取り組んだ改革派にあって、会沢は天保二（一八三一）年一月、郡奉行から御用調役に昇進し、飛ぶ鳥を落とす勢いだったが、同年十月、彰考館総裁に異動させられた。奥祐筆の鈴木宜尊も馬廻組に転職させられた。いずれも左遷といえる措置だった。彼らが党派を鮮明にしたうえ、人事を漏洩した疑いもたれたことが理由のようだった。これに対し、東湖ら改革派の郡奉行は一致して不当な人事だと主張し、その背後に保守派の執政岡部以徳がいると斉昭の人事を批判し、岡部の辞職を求めた。斉昭が拒否すると、東湖たちは病気といって職場放棄する場面もあった。斉昭と改革派は、一致結束して藩政改革を進めたが、ときに足並みの乱れもあった。

八三九）年十月、家老に次ぐ立場の番頭ら七十人ほどが半知借上げを中止するか、来春予定の斉昭の帰国を延期するかにしてほしいと訴状を斉昭に出した。斉昭は怒り、首謀とみられた大番頭で一千石の小山小四郎、大番頭で七百石の伊藤主殿、同じ額田久兵衛を罷免した。そして、斉昭は翌年一月に帰国する。同時に東湖を側用人に抜擢した。側用人は、藩主を補佐する役割だが、執政、参政に次ぐ要職であり、藩の主要ポストだ。古着屋の孫が要職に就いたことは、異例の人事であり、斉昭がいかに東湖の実力を買っていたかがわかる。このとき、改革派の戸田と武田は参政だったが、翌年に戸田が執政に昇格したの  
で、改革派が執政、参政、側用人の一角を占めた。下級藩士が中心の改革派は、大いに喜んだ。対して保守派は、重臣のなかに改革派が入ってきたことに危機感を抱いていた。それを察知したかのように斉昭は、東湖を側用人に抜擢した一月、小姓頭に一千石の結城寅寿を登用した。この時点では東湖が上席だったが、同年九月に寅寿は参政に昇格し、東湖を追い抜き、天保十三（一八四二）年には執政になる。寅寿二十五歳、東湖より十二歳若い執政の誕生に保守派は大きな期待を寄せた。斉昭が寅寿を評価したことに、東湖ら改革派は反発した。東湖は寅寿批判の封事を上呈するが、斉昭は無視しただけでなく、冷めた目で東湖を見ている。斉昭は、上級藩士と古着屋の孫という出自の違いを意識していた。

天保十四（一八四三）年五月、斉昭は天保の改革を幕府に認められ、将軍家慶から表彰された。その一年後の弘化元（一八四四）年四月、水戸に帰国していた斉昭に幕府から突然江戸城に参府するよう召喚状

#### 第四節 斉昭の改革と失脚

人事の刷新により、藩政改革を推し進めた斉昭だが、保守派の抵抗や自然災害など重なり、思うような改革を実現できなかった。天保七（一八三六）年の大飢饉は、水戸藩にも深刻な影響を与えた。翌年も余波が続き、斉昭は藩士の俸禄を半減する「半知借上げ」を実施せざるを得なかった。それほど藩財政は逼迫していた。そのような状況のなかで、斉昭は改革の具体的な四大目標を示した。改革を始めて九年目のことだ。厳しい環境だから具体策を出せたとはいえよう。

##### 一、経界之義

##### 二、土着之義

##### 三、学校之義

##### 四、総交代之義

第一にあげた経界は、農地の境界を正すという意味であり、領内すべてにおいて検地を行うことだ。斉昭は御用調役の東湖、参政の今井惟典に掛りを兼務させて、全領検地を成功させた。第二の土着は、藩士を城下から地方に土着させ、田畑を与え、武芸の鍛錬も行わせて武備の充実を図ること。すでに前年、山野辺義観を助川（現在の日立市）に土着させ、海防総司に任命し、水戸藩沿岸の海防元締めにしている。第三の学校は、藩校（弘道館）を創設し、領内各地に郷校を設けること。第四の総交代は、水戸藩独自の定府制を廃止すること。これは、完全には実現しなかったが、一部を城下のはずれに整備した新屋敷に移住させた。

改革の実をあげてきた斉昭に、保守派が反旗を翻した。天保十（一八三九）年十月、家老に次ぐ立場の番頭ら七十人ほどが半知借上げを中止するか、来春予定の斉昭の帰国を延期するかにしてほしいと訴状を斉昭に出した。斉昭は怒り、首謀とみられた大番頭で一千石の小山小四郎、大番頭で七百石の伊藤主殿、同じ額田久兵衛を罷免した。そして、斉昭は翌年一月に帰国する。同時に東湖を側用人に抜擢した。側用人は、藩主を補佐する役割だが、執政、参政に次ぐ要職であり、藩の主要ポストだ。古着屋の孫が要職に就いたことは、異例の人事であり、斉昭がいかに東湖の実力を買っていたかがわかる。このとき、改革派の戸田と武田は参政だったが、翌年に戸田が執政に昇格したの  
で、改革派が執政、参政、側用人の一角を占めた。下級藩士が中心の改革派は、大いに喜んだ。対して保守派は、重臣のなかに改革派が入ってきたことに危機感を抱いていた。それを察知したかのように斉昭は、東湖を側用人に抜擢した一月、小姓頭に一千石の結城寅寿を登用した。この時点では東湖が上席だったが、同年九月に寅寿は参政に昇格し、東湖を追い抜き、天保十三（一八四二）年には執政になる。寅寿二十五歳、東湖より十二歳若い執政の誕生に保守派は大きな期待を寄せた。斉昭が寅寿を評価したことに、東湖ら改革派は反発した。東湖は寅寿批判の封事を上呈するが、斉昭は無視しただけでなく、冷めた目で東湖を見ている。斉昭は、上級藩士と古着屋の孫という出自の違いを意識していた。

天保十四（一八四三）年五月、斉昭は天保の改革を幕府に認められ、将軍家慶から表彰された。その一年後の弘化元（一八四四）年四月、水戸に帰国していた斉昭に幕府から突然江戸城に参府するよう召喚状が届いた。斉昭にとつて突然のことだったが、江戸の重臣らは、承知していた。幕府が附家老中山備後守を呼び出し、斉昭の改革に対して七ヶ条の詰問を行い、重臣らは斉昭に伝えず、自分たちで回答書を作り、老中阿部正弘に提出していた。この行為を許せないと老中たちは直接、斉昭の弁明を聞こうと召喚状を出した。この経緯を知らされた水戸の家老結城寅寿は、急ぎ馬を走らせ、斉昭が出向いていた湊に向かった。斉昭も思わぬ召喚状に驚き、水戸に戻る途中、寅寿と出会い、説明を受けた。江戸の重臣らの対応に怒りを覚えた斉昭だが、すでに幕府からの召喚状が届いた以上、江戸城からの使者を小石川の藩邸で待つほかなく、斉昭はただちに江戸に帰る。水戸で病に臥せていた藤田東湖も寅寿とともに斉昭に従い、小石川藩邸に着いた。幕府の詰問と重臣たちの回答した内容は以下の通り。

##### 一、鉄砲連発ノ事

大砲の製造と鉄砲の揃い撃ちは、幕府のお達しに沿ったもので、外夷から日本を守るために行ったもので、疑われる筋合いではない。

##### 二、御勝手向御不足ノ御申立ニハ候へ共左迄ニハ有之間敷事

水戸藩の財政難だが、過去の幕府からの助成金問題を解決しようとして鑄銭を願う出て認められず、蝦夷地も下げ渡しされないようでは解決できない。財政難は偽りではない。

##### 三、松前今以御望ミ有之哉ノ事

蝦夷地の開拓、下げ渡しの願いは天保五年以来、申し出ている



が、それは主に海防のためであり、また水戸藩財政立て直しになると考えたからであり、怪しまれる理由はない。

#### 四、諸浪人御召抱ノ事

二、三人の浪人召し抱えは、どの大名でも行っていることで、詰問される理由とはならない。

#### 五、御宮御祭儀御改ノ事

水戸の東照宮を唯一神道に改め、仏教と分離したのは東照宮の神威を高めるためだ。

#### 六、寺院破却ノ事

寺院破却は、破戒僧を追放し、その寺は同宗の寄せ寺としたもので、宗法を守り、徳業ある者は褒賞しており、理由なく破却したわけではない。

#### 七、学校土手高サノ事

弘道館の土手を高くしたのは、築造前に幕府に凶面を提出して、許可の奉書を受けて実施しただけで、詰問される理由はない。

以上だが、この回答内容に斉昭も異議はなく、詰問されるいわれはないと幕府に反感を抱いた。ところが、幕府は重臣の回答が斉昭の回答でないことを問題視し、斉昭に直接弁明を求め、召喚状を出しておきながら、弁明の機会を与えることなく、五月六日に処罰した。しかも、処罰を伝える役割を担ったのは、水戸家の連枝にあたる高松藩主松平頼胤、守山藩主松平頼誠、府中藩主松平頼繩の三人だった。彼らが幕命として斉昭に申し渡したことは、斉昭の致仕謹慎と藩主の座を

長男の慶篤に譲ること、加えて慶篤が若年であることを理由に三連枝が後見役を務めることだった。斉昭は、幕命に従い、ただちに住み慣れた上屋敷の小石川邸を出て、別邸の駒込にある中屋敷に移り、一室に籠る。幕府に謹慎の意を表した。斉昭が処罰されたことは、その日のうちに藩内に伝わり、藩士だけでなく領内の人々に衝撃を与えた。それだけではない。斉昭の処罰と同時に、斉昭の側近である執政戸田忠敏、側用人藤田東湖のほか執政鶴殿平七や寺社奉行今井金衛門、寺社役太田甚大夫が蟄居、逼塞などの処罰を受けた。少し遅れて郡奉行の吉成又衛門、石河徳五郎、金子孫二郎、村田理介など計二十三人が処分された。改革派を一掃する処分だった。

幕府は、なぜ難癖といえるような七ヶ条を斉昭に示し、問答無用とばかり斉昭ほか斉昭を支持する改革派を処分したのだろう。そこに政治的思惑が働いたことは想像にかたくない。とくに寺社改革については、仏教界に反発する声が強く、大奥への働きかけや、宗派の本山に訴えて幕閣を説得してもらうなどロビー活動を熱心に行い、斉昭排斥の機運が大奥、幕閣に高まり、その結果として七ヶ条の詰問となり、処罰に至ったという見方だ。それだけではない。領民にしても、それまで神仏混淆が生活習慣となつてものを、神道だけにし、仏教は認めない、先祖のルーツを知る唯一の資料、心の拠り所である過去帳まで廃棄せよとなれば、反発する気持ちになることも理解できよう。改革派の理論で寺社改革を進めようとしても、情を無視した理屈の改革には領民の多くは納得しなかったと思われる。

さらに、藩内にも斉昭の改革を機に、改革派を排斥しようとする動

きがあった。斉昭が藩主に就任後、目立った改革派の登用と保守派の後退に対する保守派の不満の鬱積だ。斉昭は、戸田と藤田を中心に、周辺を改革派で固めた。この人事に、初代藩主頼房の時代から藩政を支えてきた自負のある保守派は納得できなかった。これに関連し、斉昭を慕っていた前福井藩主の松平慶永は、のちに「余思うに、藤田、戸田らは学者として有名だが、党を結ぶことは彼ら二人より起こった。だから結城寅寿を憎むこと敵のごとし。寅寿も同様だ。天下の動乱を引き起こしたのは、老公（斉昭）、藤田、戸田の三人だ。このことはましがいいない」と書き残している。水戸藩以外の、しかも水戸藩と友好的な藩主が、後年とはいえ水戸藩の内情を冷静に分析していた事実を重く受け止めるべきだろう。

その一方で、寅寿は執政として残る。また、五月十七日、戸田に代わって興津蔵人が執政となり、保守派（結城派）が藩政の主要ポストを押さえた。藩主慶篤の後見人となった連枝も斉昭の藩政に批判的だったから、斉昭の取り組んだ改革は、次々と否定され、慶篤も保守派の考えに染まっていた。

失脚した改革派も黙っていないかった。すぐに巻き返しに動く。水戸城下の下町年寄で浜田村庄屋の加藤又衛門が、斉昭の無実を訴える嘆願書を藩庁に出した。そこには、領内の寺院整理が行われたことは仏教界の現状から当然のこととし、遊民の増加を防ぎ、農村を救うことにもつながり、それは朝廷や幕府に尽くすことだと書いてある。また、天保の大飢饉の際、領内で一人の餓死者が出なかったのは、（斉昭の）ご仁徳の賜物であり、このご恩に報いたい気持ちで推察願いたいとし、

さらには、領民は江戸に出て訴えたい気持ちだが、御公儀に対して申し訳ないので、まず百姓総代としてお願いすることを理解していただきたいと記している。領内で斉昭の雪冤運動が広がりをみせるなか、これを察知した斉昭は、水戸の主な藩士に「士民の気持ちはありがたいが、不穏な行動は幕府に対して恐れ多いことなので慎むよう」諭している。

ところが十月に入ると、大番頭武田耕雲齋と南部の郡奉行吉成又衛門が行動に出る。二人は偽名を使い、江戸に潜入すると手分けして老中水野忠邦邸、牧野忠雅邸を訪ね、訴状を渡すことに成功するが、面会は許されず、水戸邸に通報され、ただちに水戸送りとなり、禁錮処分を受けた。実は、この問題が起きる直前、老中阿部正弘から水戸藩附家老中山備後守に対して、領民が江戸に出てくることがあれば、すぐに捕縛し、水戸に送り返すよう、それが遅れる場合は幕府が直接捕縛する旨、厳命があった。それだけに、藩の要職にあった二人の行為は藩庁にとって藩政に影響を及ぼす重大事だった。このため、二人は翌弘化二年に役禄を召上げられ、謹慎を命じられた。武田らに呼応するように領内の農民も江戸に向かい、義民と呼ばれ、喝采を浴びたが、その指導者は獄に入れられ、運動は下火となった。

保守派が藩政を斉昭から奪ったわけだが、十月になると雲行きが変わる。老中阿部は「御三家は諸家とちがい、日数によって（罪が）解かれるものではなく、將軍の思召しによるものだから、程なく解かれることもあるかもしれない。だから自重せよ」と藩重臣に諭している。翌月には、三連枝からも同様の通達があり、斉昭の罪が許される



日が近い雰囲気は藩内に広がった。そして、十一月二十六日、阿部らは上使として藩主慶篤に斉昭謹慎解除を伝えた。ただ、藩政への復帰を許すものではなかった。

幕府の一連の対応は不可思議だ。幕政の内情を知ることが、斉昭の失脚と復帰を理解する上で必要だろう。幕政の動きを追ってみる。

斉昭が失脚したときの老中首座は阿部正弘。その前に老中首座だった水野忠邦は、子飼いの町奉行鳥居忠輝に裏切られて失脚した。ところが六月になり、水野が再び老中に迎えられ、首座を阿部から奪った。八月に水野は鳥居を罷免した。鳥居は、かつて「蚕社の獄」で蘭学者排斥に深く関わり、高野長英や渡辺崋山を逮捕し、その辣腕が水野に評価され、南町奉行に抜擢された男。鳥居の実兄は、幕府の教育部門を抑えていた林家の代表、大学頭であり、斉昭や藤田東湖は、この兄弟を嫌っていた。相手も同様に斉昭らを嫌っていた。その鳥居が罷免されたことで、斉昭は幕府が自分たちを見る目が変わってきたと感じたようだ。では、斉昭を失脚させたのは阿部なのか、鳥居なのか。そこは政治の深い闇のなかで不明。水野が斉昭復帰に動いたのは確かなようだ。阿部は、斉昭の政治力を評価しており、失脚に積極的に動いたとは考えにくい。残るは鳥居だ。斉昭とは犬猿の仲だけに可能性は高い。

同時に、鳥居が罷免されたことで、動揺したのは保守派といわれている。実際、斉昭が謹慎解除される直前の十一月十日、寅寿は大寄合頭列となり、江戸から水戸に移された。鳥居が罷免された同じ月の八月に寅寿は執政を罷免されて表動となったが、藩政の実権は握っていない。残るは鳥居だ。斉昭とは犬猿の仲だけに可能性は高い。

府の罪で隠居謹慎を命じられた。画策した会沢、金子ら九人も蟄居を命じられた。

その後も藩内抗争が収まらないことから、幕府は弘化四（一八四七）年九月、老中阿部正弘は附家老中山備後守を呼び、寅寿の処罰と藤田・戸田の処罰解除、「義民」の釈放を求めた。藩庁は十月、寅寿の家禄一千石を半減したうえ、慎み隠居に処した。身分も大寄合頭列から中寄合に降格。遠慮の中寄合戸田と遠慮の小普請藤田は遠慮が解除されたものの、致仕謹慎を命じられた。寅寿の長男一丸は、家禄五百石を与えられ、中寄合を命じられた。この時点でも斉昭の藩政復帰は認められていない。

## 第五節 斉昭の謀略と寅寿の陰謀

ここで、結城寅寿について紹介しておこう。明治三十八年に高瀬真卿が著した「故老實歴 水戸史談」のなかで、久木直次郎は「思うにこの人は才気学問は素より人に優れた政治上の手腕をたしかに立てへている。そうして感情はモロイ性にてあるから部下を愛する事も深かつたらしい、その故結城党の人々は皆深く敬服していて団結力が甚だ固く終始一致の方向をとっていた。この人モシ戸田、藤田と肝胆相照らして老公を補佐していたならば天晴なる仕事が出来て水戸は王政維新の勲功第一となったであろう、惜しいかな戸田藤田を排斥しようとして余りに腕が利きすぎ老公までを陥れるに至って遂に自分も非命の死を遂げるに至ったのであろうと思います」と結城を評している。安政三年に青山延光に斉昭が宛てた書簡には「結城事、長倉へ預けに相成

た。しかし、江戸から水戸に異動させられた時点で、実権を失った。鳥居と寅寿の關係浅からぬものを考えざるを得ない人事だ。

失意のうちに水戸に來た寅寿に対し、保守派の重鎮である城代鈴木石見守は「辞められても、それは一時的なことで、また復帰することは目に見えています」と励ました。保守派の間では、寅寿の処分は領内の斉昭雪冤運動の激化を避けるための緊急予防的人事と受け止めていた節がある。斉昭が謹慎を解かれてから一か月後、改革派には意外な人事が行われた。保守派の太田丹波守が表動から執政に、城代の鈴木石見守が執政に昇格し、藩政の実権を握ったのだ。それだけではなく、普請奉行の谷田部雲八が奥祐筆に就任。対する改革派の三木庸之助が書院番頭を罷免され、隠居を命じられ、原田平介は町奉行から閑職の留守居物頭に左遷された。改革派の会沢正志斎は、天保の改革に尽くした改革派を冷遇することを批判した。にもかかわらず、翌年の弘化二（一八四五）年一月、すべての郡奉行を改革派から保守派に入れ替えた。三月には、弘道館教授頭取の会沢も隠居を命じられ、十月には執政大場弥右衛門が表動に左遷され、改革派は藩政の中核から締め出された。

危機感を抱いた改革派は、会沢を中心に対策を協議。紀州藩の用人、遠藤勝助が水戸藩馬廻役高橋多一郎や大番組金子孫二郎などに「水戸藩重臣が紀州藩に嘆願すること」を勧めた。これを受けて、会沢らは水戸徳川家の分家にあたる長倉松平家の当主、松平頼讓を推したてて紀州を頼ることとした。明けて弘化三（一八四六）年元旦、頼讓は紀州邸に嘆願し、三連枝にも陳情に及んだが、聞き入れられず、無断出

り候てよりも高松（高松藩主のこと）とは常々文通し、高松よりも遣わし物もあり、同人（結城）よりも上物いたし候証しも出で申し候。甲辰（弘化元年斉昭幕府より処罰された事件）の節、中納言（藩主慶篤のこと）をも打ち落とし、高松も相済まざることに候えども、畢竟、結城は谷田部らの者で、藤井（紋太夫）などより見候えばその罪百倍すべし」と痛烈に批判した。藤田東湖は嘉永年間に書いた「結城寅寿行状記」のなかで「藩政をわがものにしようと考えたのは、結城に似合わぬ出来だった。心ある者なら、すぐにでも自分の責任を申し出るべきで、老公の処分を解いてもらうように動けば天晴なのに、全くせず、天保の改革を次々に取りやめたのは、老公に背いたわけで、『大愚大悪』であり、『姦物』といわれても仕方ない」と手厳しい。ただ、東湖は、嘉永六年、谷田部雲八が結城と密議のうえ藩主慶篤に「悪逆な改革派が奥向きに入り込もうと企てているので注意してほしい」といった内容の書を上呈したことを知った改革派が、激怒し、結城を死刑にすべきと主張した際、「死刑にしては保守派が黙っていないだろうし、終身禁錮という刑は幕府にもなく、ここは『御預け』とし、藩庁には本来なら切腹のところ寛大な処分として終身禁錮とする気分となったと申されるのがよいと思う」と斉昭に助言している。実際、十月十六日の処分は、終身禁錮だった。

話しは戻るが、斉昭にとって、天保改革を幕府に評価された一年後に、再び幕府が改革の問題を挙げて自らと自らを支持した改革派を処罰したことは信じがたい事態だったろう。しかも、処罰の対象にならなかった結城寅寿と、その一派（保守派）が幕府と結託して自分たち



を貶めたと考えたことは、容易に想像がつく。斉昭は、首謀者と目される結城を許せなかった。

結城は、名門結城家の出身で、学問と馬術に優れ、斉昭に小姓として江戸に招かれる。天保三（一八）年十五歳のときだ。このとき二十八歳の藤田東湖が江戸に召され側用人となった。それから十年後、二十五歳の結城は執政まで進む。藤田は側用人のまま。改革派が藩政を掌握するなか、結城の存在は保守派にとって希望の星だった。斉昭は、結城の政治力を高く評価し、改革派を重用するなかでも結城を抜擢していった。改革派内には、藤田や会沢など結城の抜擢に反発する声もあったが、斉昭は声を無視した。結城に対する斉昭の信頼は大きかった。

それだけに、今回の結城の裏切り行為は、斉昭にしてみれば許しがたく、衝撃的事態だったろう。そこで、斉昭が考えたことは想像の域を超える奇策だった。自ら江戸の豪商「紙屋長兵衛」と名乗り、配下の者を番頭に仕立てて、結城の信頼する家人の庄兵衛を標的に決め、弘化二年八月、番頭が庄兵衛に近づき、藩お抱えの商人にしてくれば多額の賄賂を贈ることを約束すると誘いをかける。庄兵衛は、そのことを結城に相談するが、結城は改革派の罠かもしれないと断る。その後番頭は庄兵衛と面会を重ね、結城の本心を確かめる。そのなかで庄兵衛は、結城が斉昭を排斥する覚悟があり、いざとなれば殺害に及ぶ藩士の名を明かしている。斉昭は、その話を聞き、番頭に結城の企みを庄兵衛に書かせ、血判を押させるよう指示。庄兵衛は、秘話を記し、血判を押して番頭に渡した。番頭は、大番頭が結城に会って商

らかにされた。

例えば弘化三年ごろの書には「(前略)さて、いよいよ『かへり結城』(結城寅寿から寝返った庄兵衛)を吟味する時になれば、また我らから命令を下す。その節は、内密に申し付けた書付をもって庄兵衛を召し連れ、表向きの目付方に出頭しなさい。(中略)今後、庄兵衛を出してもよい時になれば、書付を持参し、庄兵衛を同道して出頭することになるであろう。よって、このように内密に申し聞かせるのである。ただ、今は庄兵衛を出頭させる状況に至っていないが、私の忠臣や有志の者が藩の役人になり、結城を預けとり、適切な時期に命令を出すので、まずはこれまで通り注意深く潜居するよう申し付ける。この書付を持っていれば、我らが万々一、黄泉の客になったとしても、我等より申し付けられたと説明できるので、(為三郎が)自分から出奔したのではないことがはっきりする。何らかの利益になると思うので(書付を)残しておいたのである」とある。また、「庄兵衛のことについて、いろいろな場面で紙長(＝紙屋長兵衛)や番頭などが書面で尋ねた際の(結城の)回答書、ならびに庄兵衛がしたためた肉筆の下書きは、きつと為三郎の方で持っていると思うが、また、庄兵衛も(証言書の件を)忘れることはないと思うが、いざ有用の場面になって、万々一庄兵衛が『誰々に云々と申し付けられたとおりに(書面を)したためたが、実はそんなことはなかった』などと申すときは、大いに見込み違いになるので、その点を心配している。また、庄兵衛が『私は字が読めないし、書けないので、下書きを書いてもらって、その通りに書いたが、私はその件については何も知らない』などと、

売の話をしたいと熱心に持ち掛けた。庄兵衛は結城に番頭が信頼できる人物であり、一度、面会してほしいと頼み、十二月、大番頭が水戸で面会する。そのとき、大番頭は高額な品をたくさん贈呈し、結城の信頼を得る。

翌年一月、江戸で大火事があった。そのあと「紙屋長兵衛」宛ての結城の直筆の書状が江戸に届く。また番頭宛ての書状も届くが「紙屋長兵衛と大番頭が江戸の大火で焼死したのは残念だが、話はこれまで通り進めていく」という内容だった。斉昭は、それをみて証拠がこれだけそろえば、十分、結城を処罰できると判断し、番頭に交渉を止めさせる。結城は、改めて「紙屋長兵衛」なる商家の存在を確認するが、実在しないことがわかり、謀られたことを知る。

斉昭は、庄兵衛がこのままでは結城に殺されると思い、斉昭側に「返り忠」(寝返り)させ、旧知の間柄の宇和島藩主伊達宗紀、宗城親子に匿ってほしいと要請する。伊達家は了解し、斉昭は庄兵衛の警護役として藩士で神道無念流の達人、菊池為三郎を同行させる。弘化四(一八四七)年四月か五月に二人は宇和島に出發した。宇和島に着いた二人は、宇和島藩の小納戸役三輪猪内の別邸に匿われる。のちに用人格吉見左膳宅に移る。菊池は病を得て、医者二宮敬作宅で診療を受けるが、ここで逃亡中の高野長英と知り合い、意気投合している。

これらの詳細が、伊達家文書のなかの「水戸一件 結城寅寿事件」に記されている。斉昭から借用した寅寿関連文書を、宗城が写したもので、実に生々しく事件が描かれている。さらに、為三郎に斉昭が出した密書数点が県立歴史館に寄託されていたものが、最近になって明

その場に臨んで申し開きをしないとも限らないので、万々一そのようなことを申すならば『天狗のはかりごと』などとされてしまう、と心配している。くれぐれも回答書などを為三郎の手元に持っているかどうか承知したい。手元になければ写しを送ろう。時間がたてば、庄兵衛もこの件について忘れてしまうかもしれない。この書面は、読んだ後に直ちに燃やすように」と記した書も。庄兵衛が再び寝返ることや、忘れてしまうことを心配する様子が具体的に書かれている。

斉昭が、結城の謀反の動きについて謀略をもって確信した一方で、結城もまた、復権に向けて密かに動いていた。藤田東湖は、嘉永年間に「結城寅寿行状記」を書いた。盟友豊田天功が結城の人となりを知りたいというので書いたといわれている。そこには「結城隠居後の行状を聞くに、悪者を集め、秘密の会合を持っていたようで、藩士以外の金持ちでは鷺子村の薄井友衛門らは必死で尽くし、学者では友部八五郎らが配下だった」と書いている。

また、明治三十八(一九〇五)年に高瀬真卿が著した「故老實歴水戸史談」のなかに結城の年表があるが、そこに「嘉永六年 寅寿三十六歳 ○谷田部雲八、尾羽平蔵らと謀りて小石川の侍女萩野の手によりて密かに順公に封書を呈す、天狗共奥向きへも追々取り入り悪逆相企て候云々との上を記す○谷田部が密に封書を呈せし事露顕して結城等を死刑に処すべしとの論政府に盛んなりしが東湖これを非とし、十月十六日寅寿は松平松之元へお預けとなり長倉に幽閉せらる○谷田部密に江戸へ微行し高松藩の君臣を頼り回復の謀をめぐらす 安政元年 寅寿三十七歳 ○結城の長男伊之介蟄居中なりしが密に父寅寿と



文通せし噂あり○伊之介父の命を以て下総結城に密行し旧臣を語らい回復の手段を運らす○小石川に在る横山兵蔵、大森金六郎（共に小姓頭取）谷田部と謀を通じ再び結城を出さんとし密議を行う 安政二年寅寿三十八歳 ○長倉に在りてますます回復の手立てをめぐらす○十月二日江戸大地震東湖、戸田忠敵震死す、結城これを聞いて東湖死なば吾も必ず殺さるべしと言いしと云う○谷田部等東湖の死を機会として君側の横山大森等と謀り回復の手段を盡し順公やこれに傾きたまへり、然れども遂に行われず、谷田部は讃州高松に走る、順公の内意によりとの説あり」と結城の年齢と復権への動きを紹介している。

## 第六節 東湖の死と寅寿の処刑

安政二（一八五五）年十月二日夜、江戸は大地震に見舞われる。小石川藩邸も大きな被害を受けた。藤田東湖は、一度屋外に出たが老母を助けようと再び屋敷に戻り、倒れてきた家屋の下敷きになり、圧死。家老の戸田忠敵も圧死した。最も信頼していた二人を失ったことは、斉昭を動揺させた。そのうえ、保守派のなかでも結城寅寿の復活に熱心に取り組んできた谷田部雲八が、これを機会に結城をなんとか藩政に戻そうと動いたことは、斉昭を激怒させる。改革派の藩士たちも同様だった。谷田部は、上手くいかないと悟ると、自分の身が危ないと思ひ、高松藩に逃れた。

その時点で、斉昭も藩庁も結城の死刑を決心し、あとは、いつ、それが処刑を結城に伝えるかを判断することだった。結局、安政三年四月二十四日夕、水戸在住の執政・山野辺主水正・大場弥右衛門・白井つそりした。やがて久木さんはじめサムライたちが出てきて、私たちに五両ずつ渡され、「いいか、今日のことを人に話したら命はないぞ」と厳しくいわれました。実は久木さんに厳しくいわれたことがこわくて今日まで、あの日のことはだれにもしゃべったことがなかったので「と語ったという。結城の処刑の実際はどうだったのか。書き残された文献によって、随分と様子が違う。

結城が処刑された日、水戸の牢獄では側医師だった十河祐元（この時は役職を奪われ、七人扶持小普請医師、揚屋入り）が町奉行から「結城の意を受け陰謀を図り、密かに斉昭公を毒殺しようとしたことは医師として不届き至極ゆえ斬罪を申しつける」と罪状を申し渡され、処刑された。この毒殺計画は、物証がなく、真実かどうか不明だ。この日、処罰された保守派は十六人。結城の子、一万丸は十五人扶持だったが、父の死罪により子として揚屋入り、所持品欠所の処罰を受けた。一万丸は、二年後の安政五（一八五八）年三月、絶食して牢死とされている。

## 第七節 天狗党の挙兵

尊王攘夷論が全国に広がる中、幕府は開国へと舵を切る。同時に、將軍継嗣問題が浮上する。御三家の紀州藩藩主徳川慶福を推す南紀派と、御三卿の一橋家当主徳川慶喜を推す一橋派だ。南紀派の中心は彦根藩主井伊直弼。一橋派は、薩摩藩主島津斉彬、福井藩主松平慶永、宇和島藩主伊達宗城ら。慶喜の父親は斉昭であり、斉昭は表立って擁立はできなかったが、慶喜の將軍就任は悲願だった。両派の対立は激

織部から目付の久木直次郎、伊藤孫兵衛に処刑の命が下った。結城を幽閉している長倉松平家には、準備の都合もあろうからと、その直前に伝えている。松平家は、これを聞き、結城に短刀を渡し、自害を勧めめるが、結城は水戸藩からの申し渡しを聞いてからでなければ、と断る。久木と伊藤は翌朝、松平家に向かった。屋敷牢にいた結城に対し、久木が牢内に入り、罪状を読み上げているうちに、先非を悔いたのか結城はすでに自害していた。久木たちは検視のうえ、屍を松平家の申し出を受けて同家に預けた。これが、水戸藩の公的見解だ。

しかし、実際は違うようだ。当事者の久木が明治三十年代に書かれた「故老實歴 水戸史談」のなかで、処刑の様子を語っている。丸太格子越しに久木が「其方儀」と読み上げると、結城は首を縮め、後ずさりし、再び読み上げるとさらに後ずさりしたため、久木は牢内に入った松平家の介錯人に目で合図すると、介錯人は背後から首を切り落としたという。また、久木の回顧談を筆記したという人物は、久木の縁者の山川菊栄さんに「久木さんが亡くなられたあと、長倉に行き、そこで聞いた話は久木さんの話と少しちがう」と語った。山川さんが書いた「覚書 幕末の水戸藩」に、その話が載っている。松平家の番人小屋にいた爺さんの話で、久木が斬りにきた日のことも覚えていたという。爺さんは「久木さんたちが中に入ってしまったら静かでしたが、そのあと何かゴチャゴチャいいあつてるかと思うと、結城さんの大きな声をして『ただ一度のご糾明もなく』『執政まで仰せつかった拙者をただ一度のご糾明もなく』とはつきり繰り返して叫んだかと思ふと、ドタバタ、ドタバタ人の駆け回るような音がしてあとは急にひしく、互いに護ることはなかった。そのような状況のなか、安政五年四月、突然、井伊が大老になったことで事態は大きく動く。斉昭らが反対していた日米修好条約が調印され、將軍に慶福が選ばれた。斉昭ら一橋派は、井伊を糾弾すべく幕府の許可なく江戸城に向いた（押しかけ登城）が、井伊は、それを理由に斉昭に慎、松平慶永に慎・塾居、慶喜に登城禁止など処罰した。

この処分に怒った水戸藩改革派や全国の尊王攘夷派の志士たちは、朝廷に働きかけ、斉昭の雪冤と井伊の失脚を訴えた。その結果、孝明天皇は幕府の内政・外交を非難し、斉昭らの処罰を疑問視する勅諭を水戸藩に下した。「戊午の密勅」だ。朝廷が幕政に干渉したことを深刻にとらえた井伊は、水戸藩に密勅の返還を求めるとともに、関係者を次々と捕縛した。尊攘志士の吉田松陰、梅田雲浜ら多くの志士をはじめ、水戸藩は斉昭が永蟄居、藩主慶篤は差控、家老安島帯刀は切腹、京都留守居役鶴飼吉左衛門は死罪、鶴飼の子幸吉は獄門など厳しい処分が下された。勅諭返納をめぐって、藩内は割れた。保守派は幕府返上を主張し、改革派のなかでも指導者の会沢正志斎は朝廷に返納すべしとし、他の改革派は断固反対の立場をとり、彼らは尊攘激派と呼ばれるようになる。

井伊大老の弾圧に対し、激派は万延元（一八六〇）年三月三日、桜田門外で井伊が登城するところを襲い、首をとる。その半年後、斉昭は水戸で急死した。持病の心臓病が原因といわれている。斉昭の死は、激派の暴走に拍車をかける。英国公使館を襲った「東禅寺事件」、そのとき幕政の中心にあった老中安藤信睦を襲った「坂下門外の変」など。



幕政は弱まり、尊攘派が勢いを盛り返す事態となり、長州、薩摩藩も朝廷を動かす、攘夷の実行を幕府に迫った。文久三（一八六三）年八月、幕閣は政変を起こし、朝廷を抑え、尊攘派を排除する。これに、對抗する動きが全国に広がる。水戸藩にも攘夷を実行し、幕政を変え、藩内の主導権を奪おうとする激派の動きが出る。元治元（一八六四）年三月、筑波山で拳兵した天狗党だ。水戸町奉行田丸楯之衛門を大将とする彼らは、日光参拝し、氣勢をあげると、藩領内に戻り、保守派の諸生党と各地で戦闘に入る。当初は、天狗党が優勢だったが、幕府軍が諸生党に加勢するようになると、ほぼ五角の戦いとなる。幕府は、藩主慶篤に騒乱を鎮めるよう命じる。病弱の慶篤は、名代に支藩水戸藩主松平頼徳を遣わしたが、水戸城内に籠った諸生党は、頼徳軍に尊攘鎮派の武田耕雲斎軍と榊原新左衛門軍が合流したことから、危機感を抱き、頼徳の入城を拒否。頼徳軍らは態勢を立て直そうと那珂湊に移動した。そこに天狗党も合流、保守派（諸生党）対改革派（天狗党）の構図となった。那珂湊で激戦となるが、勝負はつかず、双方とも消耗した。

頼徳にとって思わぬ展開となり、釈明しようと単独降伏するが、幕府軍と諸生党は認めず、切腹を命じた。この処罰は改革派を動揺させた。幕府と戦うつもりはないと榊原軍（大発勢）は降伏した。残った天狗党と武田軍は、次第が増えていく幕府軍を前に戦闘意欲を失い、京都にいる慶喜を頼ろうと西上する。約千人の行軍は苛烈を極めた。京都に近づいたころ、天狗党に衝撃の情報が入った。頼りにした幕府の禁裏守衛総督慶喜が天狗党追討軍を指揮し、討伐に向かっている

慶応年間に入ると、諸生党は残った天狗党や敦賀から戻された天狗党を厳しく処罰しただけでなく、総大将武田耕雲斎の家族を幼子や女性を含め、斬首する。生き残ったのは四男猛と長男彦衛門（敦賀で斬首）の子金次郎（遠島）だけだった。また、幕府に降伏し、各藩に預けられていた大発勢の処刑も始まった。大将榊原新左衛門と古河藩に預けられていた藩士、郷土多数が処刑されると、各藩は次々と処刑を行った。

天狗党との戦いで共闘した鎮派（尊王攘夷論者だが激派より穏健な存在）に対しても、市川らは厳しく対処した。慶応元年一月、鎮派の幹部である大寄合頭戸田銀次郎、大番組渡辺半介、寄合久木直次郎らの食糧、家屋敷とも没収して御用長屋に禁錮した。戸田は、斉昭を支える中心的人物で水戸藩の「三田」と称された藤田東湖、武田耕雲斎、戸田忠敏の一人、戸田の継嗣。父親同様に執政まで務めた千石取りの重臣だ。その戸田が処罰されたのは、市川との権力争い。市川ら諸生党が天狗党や家族に対して厳罰を科したことに異を唱える戸田ら鎮派は、排除すべき存在となった。戸田に共鳴する若年寄の近藤儀太夫、郡奉行菊池善左衛門、御用調役内藤弥太夫らも藩政から遠ざけられる。

諸生党が藩政を握ると、最初に取り組んだのは郷中改革だ。天狗党躍進の原動力となった郷校と農兵の廃止だった。郷校で郷士をはじめ、農民、神官などが尊王攘夷思想を学び、天狗党に走ったからだ。また、今後は朱子学を学ぶよう通達を出し、水戸学に異を唱えた。農民は、本来の農業に精を出し、農村復興に努めるよう触れを出した。

という。天狗党は、金沢藩に降伏した。このときの心境を慶喜は、のちに「あれはね、攘夷とか何とかいうけど、その実は党派の争いなんだ。攘夷を主としてどうこうというわけではない。情実においては可哀そうなところもあるのだ。しかし何しろ幕府の方に手向かって戦争をしたのだ。そうしてみると、その廉でまったく罪なしといわれない。その時は、私の身の上が危うかった。それでどうも何分にも武田のことをはじめ口にだすわけにはいかぬ事情があったんだ」と一橋家の家臣だった渋沢栄一に語っている。慶喜の身が危ういとの理由は、薩摩藩が裏で慶喜追い落としのため、天狗党を支援する動きがあったことを指すと思われる。幕府側の要職にある慶喜の立場と、天狗党の本意を見抜いていた慶喜の心情を吐露する内容だ。幕府軍は、彼らを敦賀のにしん蔵に押し込め、総大将の武田耕雲斎ら三百五十人を処刑した。慶応元（一八六五）年二月、徳川幕府では前例のないような大量処刑だった。ほかの天狗党は、水戸に返されたほか、小浜藩に預けられた。

## 第八節 諸生党の支配

天狗党が水戸藩を脱出し、京都に向かい、主力が処刑されたことで、水戸藩政は諸生党が握る。その筆頭は、城代の鈴木石見守であり、朝比奈弥太郎、大森弥三左衛門、寛助太夫、佐藤図書ら重臣が固めたが、なかでも市川三左衛門の活躍は目立った。市川は、天狗諸生の戦いで武功をあげ、石高を大いに挙げ、重臣の地位を確立した。ほかの幹部たちも石高をかなり増やした。

その一方で、天狗党追討に尽くした保守派の農兵組織は評価された。彼らは、天狗党に金品を強奪され、人足として駆り出されることに武力で抵抗した。鷺子村（常陸大宮市）の薄井勢、大子村（大子町）の益子勢、馬頭村（栃木県那珂町）の星小野衛門、北条斧四郎、額田北郷（那珂市）の寺門勢、鯉淵村（水戸市）の鯉淵勢、河和田村（同）の河和田勢など知られている。なかでも鯉淵勢と河和田勢は大規模で、諸生党の一翼を担う存在だった。

諸生党が天狗党、鎮派を処分して藩政を完全に掌握すると、危機感を持ち、水戸藩と縁戚関係にある諸藩に救いを求めていったのは、京都で慶喜の警護役を務めていた本圀寺勢だ。彼らは、天狗党に理解を示していたので諸生党から財政支援を打ち切られ、帰国を促されると、諸生党に粛清されることを恐れ、朝廷や縁戚諸藩に諸生党を排除するよう協力を働きかける。諸生党は、彼らの動きに敏感に反応。また、京都にいた慶喜が將軍になるとのうわさも流れ、慶喜が將軍となれば、自分たちは処罰される可能性が高いと思い、牢獄にあった元参政岡田新太郎、元小姓美濃部又五郎など十七人を慶応元年十月二十五日の真夜中に処刑した。対抗勢力を根絶やしにしたのだった。朝廷は反発し、諸生党の藩政を正すよう附家老中山備中守に上京を命じた。諸生党により差し控えの立場にあった中山だったが、幕府は慶応二年八月、中山の差し控えを解き、上京を命じた。幕府も諸生党の強引な藩政を正す必要を感じていたからだ。その後、幕府はたびたび諸生党に藩政改革を求め、圧力をかけ続け、慶応三年六月、諸生党の最高位にある鈴木石見守が家老職を罷免された。



慶応三年十月十四日、將軍慶喜は大政奉還した。これに対して藩政の実権を離さなかつた諸生党の市川三左衛門は、ただちに重臣を集め、総力をあげて幕府再興に努めることを決議する。そして、藩政強化のため、さきに幕府から罷免されていた鈴木石見守や朝比奈弥太郎、大森弥三左衛門、佐藤図書ら重臣を復職させた。

## 第二章 戊辰戦争と水戸藩

### 第一節 本圀寺勢と天狗党の復権

もともと本圀寺勢は文久年間に水戸藩主慶篤に従い、上洛し、その後は朝廷の命で京都の守護にあたり、慶喜が元治元年に禁裏守衛総督に就任すると、一橋家では家臣が少ないため、親家の水戸藩に警護を依頼する。宿泊先が本圀寺だったから本圀寺勢と呼ばれるようになる。総勢三百人ほどで、指揮者は家老の大場一真斎。尊王攘夷論者が多く、天狗党に親近感を持つ者が多かった。しかし、反幕ではなく、尊王敬幕思想が支配し、全体としての立場はあいまいだった。それゆえ、朝廷と幕府の対立が深まると、自分たちの立ち位置が微妙となり、混乱する。朝廷の側につくべきと主張する意見があれば、幕府側につくべきと主張する意見もあり、内部対立した。結局、国政に関与せず、水戸藩政を諸生党から奪還するという従来からの一環した共通目標にむけて団結しようということになった。

幕府は慶応三年九月、本圀寺勢に御所の九つの門の巡視を命じる。同年十一月、大場は部下を連れて二条城に慶喜を訪ね、水戸藩政回復に取り組みたいと訴えた。慶喜は、これを聞き入れ、大目付に水戸藩政改正に着手するよう命じたが、国政が緊迫した情勢にあって、実現しなかった。加えて、老中稲葉正邦に水戸用掛の内命が下ったが、稲葉は力不足を理由に固辞した。幕府存亡の危機にあって、水戸藩の内部抗争になど関わりたくないというのが本心だったろう。慶喜は、水戸藩が一致して自分を支援してくれることを期待したのだから、幕

府は動かなかった。それだけでなく、朝廷は十二月三日、慶喜に対し、水戸藩主慶篤を呼び出し、尊王の道に励むよう取り計らえと命令した。さらに朝廷は、王政復古の号令を出した直後の十二月十二日、二条城の留守を本圀寺勢に命じている。同時に大阪に下る慶喜からも二条城の留守を命じられた。このとき、新選組も幕府から二条城の守備を命じられており、局長の近藤勇が大場を訪ね、「一緒に二条城を守ろう」と申し入れたが、同席した長谷川作十郎は「勅命であり、水戸藩は水戸藩だけで守る」と拒否した。だが、内心は慶喜の命令は幕府の命令であり、朝廷の命令と重なった二条城の守備は、本圀寺勢には難題だった。長谷川は、会津藩と長州・薩摩藩から疑いの目を向けられたと記録している。幕府・朝廷の側に立つ双方の諸藩から疑念を持たれる二条城の守備は、本圀寺勢にとって居心地が悪かった。二条城の守備を命じた朝廷は、翌日には解任すると、泉涌寺御陵の警備を命じた。朝命を受けた彼らは、隊長の大場以下十数人を二条城に残し、他の者は泉涌寺御陵の警護にあたることにした。

慶応四年一月一日、旧幕府は「幼い天子を擁して、私意をほしきままにする薩摩を討伐する」と宣言し、大阪で拳兵し、京都に向かった。二日夜、本圀寺勢のもとに二条城留守御免の通達が届いた。このため翌日、二条城にいた本圀寺勢は、泉涌寺に移動し、陵墓の警護にあたった。その日、鳥羽伏見で旧幕府軍と新政府軍の戦いが始まった。砲声を聞きながら、本圀寺勢は泉涌寺の警護に専念したが、まもなく新政府軍が勝利すると、自分たちの進路を話し合うことになる。「王政復古は、光圀公と斉昭公の考えであり、水戸藩として新政府軍に加わ



るべき」と主張する者があれば、「慶喜公が朝敵にされたのは本意でなく、尾張・福井藩に依頼し、冤罪を晴らすべき」との意見も出た。「藩主を奸徒（諸生党）の手から奪還することが先決だ」との意見も出て、紛糾した。結局は、藩政の奪還を図ることに決め、新政府に藩政を奪還することで、朝廷に奉仕する態勢ができるので、この方針を認めてほしいと訴えた。一月十九日、朝廷は大場一真齊ほか本圀寺勢の泉涌寺警護を免じ、慶篤宛ての「除奸反正」の勅書を下した。要は、水戸藩政を支配している諸生党を排除し、朝廷寄りの藩政を敷くように朝廷が命じたわけだ。晴れて江戸に帰ることが許された本圀寺勢は、翌日、京都を出発した。ただ、大場は病氣療養中だったので京都に残り、家老鈴木縫殿が代表となり、二百二十余人余が勇躍、出発した。とはいふものの、いざ出発すると道中、薩摩藩と遭遇しないか気になった。長谷川作十郎は、大津に達するまでは薩摩藩が追つてこないか気がかりだったと書き残している。理由は、本圀寺勢が京都にいたとき、薩摩藩士を「いも侍」と馬鹿にしていたからだ。慶喜もそうだが、御三家の水戸藩は、外様大名の薩摩藩を馬鹿にしていたよつで、新政府軍の中核となった薩摩藩に仕返しされることを本圀寺勢は恐れていたことが伺える。本圀寺勢は、大津から荷物に「勅諭」と大書した荷札をつけ、朝廷の意を借りて薩摩藩の襲撃を交わそうとした滑稽な話が伝わっている。

江戸に到着する直前、本圀寺勢は長谷川と磯部秀之介らを先発隊として江戸の水戸藩邸を探らせる。諸生党が武装して待機していると知った長谷川らは、江戸城に謹慎していた慶喜に面会、事情を説明する

つたため遠島処分となり、小浜藩に預けられていた。水戸では祖母や幼い弟たちも処刑されたこと知った金次郎は、復讐の鬼となっていた。王政復古となり、慶応四年一月、二十一歳となった金次郎は罪を許され、同志百三十人とともに四月二十八日に江戸に着くと、閏四月五日から三日間で諸生党十人余を暗殺した。五月二十一日に水戸帰藩が許されると、金次郎は派手ないでたちで水戸に帰る。帰国した金次郎は、配下の者たちと諸生党を「天誅」と称して、次々と襲い、殺した。なかでも六月十日は十三人を殺し、城下を恐怖に染めた。さすがに、その暴挙に黙っていられなかつた藩士五百人余が藩庁に押しかけ、金次郎の所業を責めた。金次郎も反発し、武装した。城内は緊迫したが、弘道館で謹慎していた慶喜が見かねて旧幕府の目付岡田斧五郎に調停を命じ、金次郎は配下三人を処刑、金次郎を訴えた近藤儀太夫らを牢に入れることで決着した。それから一か月もたない七月四日、金次郎は若年寄に昇進。市川勢の追討軍の幹部として越後に派遣された。藩庁は、厄介者の金次郎を昇進させて、藩外に追い出したとみられる。

## 第二節 市川勢の軌跡

城代鈴木石見守の屋敷は、改革派の鎮派らに奪われた水戸城を奪還して城に籠り、江戸から来る本圀寺勢と天狗党を迎撃すべきと主張する者と、城下を戦火の危機にさらすことを避け、ひとまず会津藩を頼り、幕府再興を目指すべきと主張する者が互いに譲らず、緊迫した雰囲気にも包まれていた。重臣のなかでも天狗諸生の戦いで武功を挙げた

と、慶喜は藩主慶篤を江戸城に呼び出し、江戸城で勅諭を渡せばよいと忠告する。慶喜は、さらに諸生党のなかの強硬派を江戸城に呼び出し、城下で逮捕すればよいと提案。いずれも実現し、藩主と強硬派を抑えられた諸生党は、戦意を失い、水戸に逃げ帰ることとなった。こうして本圀寺勢は、戦わずして水戸藩邸を奪い取ることができた。これを知り、江戸市中に隠れていた天狗党の生き残りや諸藩に預けられていた大発勢などが続々と藩邸にやってきた。これを見届けるように慶喜は、江戸城から上野寛永寺に移り、朝廷に身をもって恭順の意を示した。

江戸の水戸藩邸を難なく奪還した本圀寺勢は、市川勢が会津に去ったあとの三月十六日、勅書を奉じて水戸に到着した。藩主慶篤も二十一日に水戸城に入った。しかし、病状が悪化、四月五日に三十七歳の若さで病没した。それに先立ち、本圀寺勢を中心とする約千人の市川勢追討軍が鈴木縫殿を大将に会津に出発している。会津領内に入ることを断られた追討軍は、藩主危篤の報を受け、急遽、水戸に引き返したが、すでに慶篤は亡くなっていた。本圀寺勢が水戸に到着すると、すぐに諸生狩りが始まり、家老大森弥三左衛門の実弟で小姓頭の大森金八郎は城に呼び出され、大手橋付近で従者二人とともに殺害され、馬廻組五百城縫殿之助も大手前で殺された。自宅で殺害されたのは、勘定奉行の岡田左次衛門親子や若年寄藤田主書、町奉行小笠原五兵衛など。諸生党に対する処罰は続いた。

それに追い打ちをかけたのが武田金次郎だ。天狗党の大将武田耕雲斎の孫。父彦衛門と叔父魁介は敦賀で処刑され、自分は十七歳と若か市川三左衛門が、結論を出した。烈公夫人の住む水戸城で戦うことは避け、会津に行き、共に幕府再興を目指そうという意見だ。実績のある市川の考えに異を唱える者はなく、慶応四年三月十日夜、総勢五百人余の一行は、武備を整え、水戸城を眺めながら那珂川を渡り、太田村（常陸太田市）を目指して出発した。大将は市川、ほかに朝比奈弥太郎、大森弥三左衛門、佐藤図書、寛助太夫の四人の家老が副将格となり、市川を支えた。一団を市川勢と呼ぶ。翌日、太田村に到着すると、鈴木が家臣を市川に預けて、一人、江戸に行くという。鈴木の家族は、初代の出身地である山吉田（愛知県南設楽郡蓬来町下吉田）に逃れようと江戸から山吉田に向かっていた。鈴木石見守は、彼らに合流するつもりだった。しかし、江戸で捕まり、幼い男児二人とともに水戸に戻され、みな斬首された。山吉田に逃れた先代当主重矩も連れ戻され、牢獄で絶食し、亡くなる。

市川勢は、太田村を出ると、天下野、大子を経て水戸藩領を抜け、棚倉を経て、釜子、矢吹を通過。三月十七日に会津藩領内に入る勢至堂峠の関門で、門番に止められる。藩の許可がなければ通せないという。許可を待つ間、藩境にある府中藩の長沼陣屋に二泊する。会津藩の伝令が戻り、市川勢に伝えたのは、領内を通過することは許すが、城に入ることは認めないというもの。理由は、このとき会津藩は、朝廷に対して敵対する意志がないことを訴えていた最中で、そこに幕府再興を掲げた市川勢が来たとなれば、新政府と対決するとみなされる恐れがあると考えたからだ。その説明に納得した市川勢は、会津藩の指示に従い、猪苗代湖に沿って北上し、三代、原を経て、三月二十一





勢至堂峠に残る会津藩領の境を示す石碑  
(須賀川市立歴史民俗資料館提供)

た。奉行は、江戸に向かい、留守を預かっていたのは、のちに茨城県権令になる中山信安だった。中山は、金塊は江戸城に持っていき、奉行所にはないといい、信じないならば家探ししてもよいといった。寛たちは、何度も探し回ったが、見つからず、時間だけが過ぎた。そのうち、寺泊の本隊から新政府軍が迫ってきたので、至急戻るよう連絡が入り、寛は、金塊をあきらめ、寺泊に帰った。明治になり、中山は新政府軍に奉行所が外部に隠していた金塊を引き渡したという。そして、新政府の役人となった。

市川勢は、寺泊にとどまる部隊と出雲崎にでた部隊に分かれていた。四月が過ぎ、閏四月。現在なら五月下旬にあたるころ、出雲崎の宿屋、大崎屋には伊藤辰之助の小部隊が宿泊していた。閏四月一日、大崎屋の前で事件が起きた。博徒のような恰好をしていた男が馬から降りたが、その姿がさつそうとして博徒とは思えないのを、通りがかった目明しが怪しみ、尋問する。宿にいた伊藤隊も出てきて、男を取り囲んだ。挙動不審な様子に、伊藤隊は男を宿屋に連行し、厳しい取り調べを行った。男は、名を富山弥兵衛という。薩摩藩出身で、慶応元(一八六五)年、新選組参謀の伊東甲子太郎(かすみがうら市中志筑出身)の紹介で新選組に入隊する。その後、伊東が新選組局長近藤勇と意見が合わず脱退し、御陵衛士になると、行動を共にした。十数人の集団だが、宿舎とした高台寺の名をとって高台寺党とのちに呼ばれる。伊東はまもなく新選組に暗殺され、富山らは復讐しようと近藤を銃撃し、けがを負わせた。慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いで、薩摩軍に加わった高台寺党のなかに富山もいた。そこで銃創を負い、回復



市川勢が脱出行を開始した水戸市の水門橋

日会津坂下に宿泊した。そこに、会津藩を代表して佐川官兵衛が部下を連れてやってきた。佐川は、非礼を詫び、道案内と資金を提供するので会津藩領のある越後に向くことを勧める。また、間者が領内にいる可能性があるのも、市川勢と悟られぬよう偽名を名乗ることを求めた。市川は、全員は無理なので、家老級の幹部だけ偽名とすることを了解した。

会津藩陣屋のある水原で十分休み、新潟に着いたのは四月八日。すでに旧幕府軍の衝鋒隊七百人が新潟入りしていたが、資金不足のため奉行所に越後諸藩や商人を集めては資金を強要し、治安は乱れていた。奉行所は、長岡藩に救いを求め、家老河井継之助が乗り込み、衝鋒隊を追い出した。その直後に市川勢が新潟入りしたため、諸藩や町民、商家は衝鋒隊と同様とみて市川勢を恐れた。しかし、市川勢が紳士的な態度だったことから好感をもたれたという。総じて、市川勢は統率がとれ、住民から金品を奪うような悪行をしなかったといわれている。それは、市川勢が自ら軍資金を用意したこと、会津藩が資金提供してくれたことによる。新潟で六日間過ごした市川勢は、二日後に寺が多い港町の寺泊に到着する。

まもなく、道案内の会津藩士に佐渡奉行所で金塊を提供してもらいたいと要請された。実は、会津藩は一か月ほど前、佐渡奉行所に同様の要求をして断られている。市川勢なら可能と思ったのだろうか。市川勢は、会津藩から資金提供を受けているだけに、受けざるをえなかったろう。寛助太夫率いる部隊が、二手に分かれ、寺泊と出雲崎から佐渡の赤泊、小木に到着。合流すると佐渡奉行所のある相川を目指し





水原代官所（復元）

『市川三左衛門等四百人余、各自鎗、鉄砲を持参、会津勢至堂へ一同泊り（中略）四月八日新潟に至り、十四日まで滞留、会津藩の西郷源五郎と談合、千両ほど借用した由、同十六日弥彦、寺泊に泊り、一部は出雲崎泊りで、十七日佐渡へ渡る計画のところ七日ぐらひは滞留になるだろうとの風聞、十七日佐渡の陣屋より兩人ほど寺泊に来て市川勢のだれかと対談した由、市川勢の宿泊料その他道中の費用だが、勢至堂より水原辺りまでは会津藩が代わって支払ったらしい。新潟からは市川方で出した（中略）。道中筋は穩便に通行した由。』報告したの



市川勢が佐川官兵衛と面会した会津坂下

を待った富山は二月には東征軍に従い、江戸に行く。四月に京に戻る。と、新政府軍参謀の黒田清輝に越後探索を命じられる。新選組もそうだが、富山は問者の役目を絶えず負わされていたようだ。博徒姿に変装した富山は、越後で情報収集しながら出雲崎に着いたところで捕まった。

拷問を受け、大崎屋に近い撰津屋という旅籠に連行された富山は、二階の柱に縛られた。翌朝、うまく縄をほどき、二階から飛び降り逃げ出すが、伊藤隊に気づかれ、追われる。富山は知らない土地のため、ひたすら山の見える方角に逃げ、宿から東に二里ほど離れた吉水村の教念寺近くまで来たところで、伊藤隊に追いつかれ、急峻な山に逃げ込むが、転げ落ち、田んぼに足を取られたところを、伊藤隊二十数人と刃を交わすが、槍で刺殺された。伊藤は富山の奮戦ぶりに「敵ながらあっぱれ」と称賛したという。富山の遺体は地元の人々が教念寺に葬り、碑を建てた。

伊藤隊が富山を惨殺した翌日、寺泊から市川勢の本隊の市川三左衛門、大森弥三左衛門の部隊が出雲崎にやってきた。目的は、新政府軍と対決する際の陣地とするための出雲崎代官所の占拠。このとき、代官所には衝鋒隊が陣取っていた。彼らは、代官所に金の無心をし、居座っていた。市川らは、代官所の役人に代官所の明け渡しを要求。衝鋒隊を追い出し、町の治安維持に努めると役人を説得した。役人は即答できないと断るが、三日後、再び代官所に来ると、市川、大森、朝比奈弥太郎（いづれも偽名）の名を記した宿札を張り出し、「今後は水戸方が出雲崎を警護する」と一方的に宣言。兵士の宿舎にした。陣





家老佐藤図書が眠る寺泊の法福寺

は水戸藩探索方の磯部秀之助。磯部がほかの者と閏四月十一日、水戸藩庁に提出した「脱奸踪跡探偵書」の一部だ。穏便に通行と記している。このほか市川が芳賀、佐藤が信夫、朝比奈が堤と変名したことも指摘しており、市川勢の動向を正確に伝えている。磯部が藩内でのような立場だったか明らかでないが、藩が藩主帰国に費用がかかるからと村々に献金を命じたとき、幡村（常陸太田市）の山横目、堀江次郎衛門が閏四月二十九日に関係十三か村から二百八十八両を献納する旨の文書を藩に提出した際の宛名に磯部の名がある。磯部は民政に関わっていたのだろう。

話を戻す。寺泊に帰ってきた笈部隊は、本隊と合流し、出雲崎代官所まで出向き臨戦態勢に入る。

会津藩の朝廷への嘆願は薩長により無視され、会津藩も薩長を中心とした新政府軍と戦う覚悟を決める。奥羽列藩同盟が成立、中立の立場をとっていた長岡藩も同盟に加わり、東北、越後の諸藩と新政府軍の戦闘が始まる。陸路、北越鎮撫に向かった新政府軍を指揮したのは、黒田清輝、山形有朋、岩村精一郎だった。彼らが最初に標的にしたのは、桑名藩の飛び地だった柏崎。閏四月二十七日、柏崎の海岸鯨波付近で桑名藩と新政府軍が衝突したとの報を受け、出雲崎代官所に布陣していた市川勢の朝比奈、大森の部隊が会津藩兵とともに桑名藩の援護に走った。市川勢は、これが初めての戦闘だった。同盟側は当初優勢に戦ったが、次第に新政府軍が勢いを増し、翌日になると形勢逆転。市川勢は出雲崎方面に退却し、会津藩と桑名藩は柏崎の北三里ほどの

### 佐藤図書の墓



佐藤図書守備近は、水戸藩の重鎮で、元治元年（一八六四）の「天狗・諸生の乱」の際には、市川三左衛門、朝比奈藤太郎らと共に門閥派の諸生らと争って天狗派（改革派）を退けた。その後、戊辰戦争では官軍に對抗し、同治五〇〇金巻と共に水戸からの脱出を企図された。明治元年（一八六八）五月、北越戊辰の役の合戦中に寺泊で病死し、ここに葬られた。

享年四十四歳。法号は大乗院殿實相日信居士。

平成二十五年七月 水戸市教育委員会



家老佐藤図書の墓

妙法寺に陣取り、新政府軍と対峙した。

市川勢は五月三日、妙法寺の西一・五里にある海岸沿いの椎名藩一万石の陣屋に乗り込み、加勢を求める。小藩の椎名藩は、新政府軍に密使を送り、援軍派遣を要請。椎谷の南半里の宮川に布陣していた薩摩藩は、ただちに援軍を送り、市川勢と小競り合いとなる。六日夜、新政府軍は椎谷と妙法寺に総攻撃をかけ、不意を突かれた市川勢は戦死者十七人、負傷者七人のほか捕縛された者も十五、六人に及んだ。水戸を出て、初めての戦死だ。そのなかには、大目付荻昌介、大番組野長兵衛のほか、城代鈴木石見守の家来三人もいた。この戦いの直前の五月四日、寺泊で病臥にあった家老佐藤図書が息を引き取り、近くの法福寺に葬られた。四十四歳だった。ただ、墓は立てられず、目の石ころが数個置かれただけだった。

宮川、椎谷で痛手を負った市川勢は、一週間後の五月十四日、少し内陸に入った丘陵地帯の灰爪・市ノ坪で大敗を喫する。戦死者は六十五人に達した。負傷者も多かった。笈の弟平三郎や郡奉行岡野莊七郎が戦死、負傷した中には大森弥三左衛門の実弟で、結城寅寿家の跡を継いだ小姓頭取結城七之介もいた。結城は、その後も転戦するが六月五日に亡くなり、天神塚村の東洋寺に葬られ、明治になり、水戸市にある結城家の菩提寺「清厳寺」に墓が建てられた。そこには寅寿と長男一万丸、そして七之介の三人の名が刻まれている。七之介は、処刑された寅寿と一万丸が獄死したことで、結城家が絶えることを惜しんだ斉昭の計らいで、寅寿の娘美智の婿となり、結城家を継いだといわれている。二人の間には千代という女の子ができた。明治になると、





椎谷陣屋跡



出雲崎代官所跡

千代が婿を取り、結城家は継承された。市川勢は、出雲崎代官所を撤退する際、町に火をかけず、街路で松明を燃やすことで、町が火の海になることを避けた。このことが、出雲崎の人々に感謝され、市川勢の評価を高めている。市川勢は、無益な殺生をしなかった。

市川勢が、越後で激戦を展開していたころ、江戸から武田金次郎率いる天狗党の生き残りが水戸に向けて行軍していた。派手な立ち振る舞いで街道沿いの人々を驚かした。五月二十八日、水戸に着くと、武田らはすぐに暗殺を始める。江戸で、かなりの暗殺を行ったことが、伝わっていたので、武田らが到着すると、水戸の城下は緊張に包まれた。とくにひどかったのは六月十日。御用召御達留という文書は「十日夜、武田勢にて天誅の人」として十三人の名を記し、そのうち五人は首なしと記録している。いずれも街中、自宅で殺害され、なかには親子で殺害されたケースも。当時の様子を「きのうふの夢」という資料には「市川（三左衛門）等も暴は暴なれども武田の凶暴は言語道断なり」と記している。武田らの凶行に、中間派の藩士らが抗議の声をあげる。近藤儀太夫、青山勇之介、久米孝三郎ら五百人が水戸城に登城し、武田らの非を訴えた。そこに武田勢が乗り込み、藩庁は騒然となった。藩は武田らの非を認め、謝罪を求めたが、武田は応ぜず、武田勢の隊員は威嚇の発砲をする。弘道館に謹慎中の前將軍徳川慶喜は、水戸に來てから政治に口を出さなかったが、藩内の混乱を知らされると黙っていられず、旧幕府目付の岡田斧五郎に調停を命じた。難航したが、結局、武田側から三人を処刑し、一方の近藤ら数人を投獄、謹慎処分とすることで決着した。武田は、それから一か月もたたないうちに若年

寄に昇任し、市川勢の第二次追討軍の先鋒隊長として北越に向けて出発する。近藤と行動を共にした学者の青山は謹慎処分となったが、身の危険を感じて、水戸を脱出する。

六月に入ると、市川勢の動きが見えなくなる。それは、資料（戊辰役戦史、会津戊辰戦史、出雲崎編年史等）に市川勢の足跡が出てこなくなったからだ。この月、奥羽列藩同盟が新政府に対抗する政権の樹立を東北で目指す動きをする。江戸・上野の彰義隊が新政府軍との戦闘に敗れると、上野・寛永寺の代表を務めていた輪王寺宮を六月六日、会津城に招くと、同盟の盟主に担ごうとの協議がなされ、輪王寺宮も了承。六月十六日に実現するが、輪王寺宮は軍事面の担当は断る。あくまで政治面での代表を受け入れるという姿勢だった。この消極的な態度が、軍事面での対立化している局面において奥羽列藩同盟には輪王寺宮の本気度を疑う結果となり、東北に朝廷に対抗する政権の樹立構想は消えた。輪王寺宮が同盟の真の盟主となり、錦の御旗を立てば、日本は朝廷の分裂と、二つの錦の御旗が衝突する異常事態となっていたろう。この日、新政府軍は平潟港に上陸し、二十四日には棚倉城を占拠。二十九日、大総督府は宍戸、松岡藩主らに市川三左衛門らを罰することを命じる。

七月四日、会津藩の佐川官兵衛率いる精銳部隊の朱雀四番士中隊や青龍三番士中隊とともに地藏堂（寺泊と三条のほぼ中間地点）を出発した市川勢は、与板の北方岩方村から山に入り、与板城に連なる山間部に胸壁を築く。その後、寛隊の約八十人は近くを流れる信濃川の堤防の胸壁を守り、市川隊の約百二十人は堤防以西を守り、朝比奈隊の





会津城（鶴ヶ城）天守閣



灰爪の丘供養塔

約百人は鷹ヶ嶺以西の守りに就いた。このとき、大森隊と旧佐藤隊の配置が諸文献ではっきりしていない。ともあれ、市川勢の配置が、この時点で与板城の周辺になされていたことがわかる。

七月十三日、寺泊と出雲崎の中間辺りに位置する馬頭見張り台で、市川勢の十五人が新政府軍との激突の中で討ち死にした。この辺りでは、六月中旬から奥羽列藩同盟と新政府軍との間で連日のように戦闘が繰り広げられていた。同二十五日、寛隊は会津藩兵とともに元与板の新政府軍陣地を攻撃。二十八日には、市川隊と朝比奈隊が与板城を襲うが、奪うことはできなかった。この日、水戸では水戸藩の第二次追討軍が北越に向けて出発した。そのなかには武田金次郎もいた。

このころ北越では同盟軍が劣勢にあり、七月二十九日には五日前に奪回したばかりの長岡城が再び落城した。また、二十八日、新発田藩が新政府軍に寝返った。このため退路がなくなる恐れもあり、同盟軍は八月一日に総退却を開始した。市川勢は三条に至り、八月二日、佐藤織之助率いる新遊撃隊が一の木戸で新政府軍に砲撃されると、会津、桑名両藩とともに援護する。同盟軍は、仲間を助けながら新政府軍の追撃をかわしながら退却を続ける。市川勢の多くは、翌日には加茂、四日は村松城に入るが、一部は戦闘の最中に別行動をとるようになり、会津勢に助けを求める場面もあって混乱した。同盟軍は、退却先を会津城と決め、追ってくる新政府軍と小競り合いをしながら退却を続けるが、新政府軍が迫ってきたため、街道沿いの撤退をあきらめ、険しい山岳地帯で迎撃することにする。市川勢の本隊は、会津青龍三番士中隊と高石を守る。このころ、市川勢のほとんどが会津藩の指揮

下に入っていた。険しい山越えで新政府軍の追討を避けながら、津川に着いたのは八月中旬ごろ。津川は、新潟を目指した三月下旬に通過して以来、五か月ぶりだった。山並みの景色も変わっていたが、市川勢の顔ぶれも変わった。家老佐藤図書をはじめ、百人以上が戦死、あるいは病死、行方不明となり、勢力は弱まっていた。

一方、市川勢の追討に向けて七月下旬に水戸を出発した武田金次郎らによる第二次追討軍約千人は、笠間、小山、前橋から三国峠を越えて越後に入る。八月十七日、越後口総督府に新政府軍への編入を願い出て許される。併せて市川勢の討伐も認められる。同二十日、追討軍は越後高田に到着した。このとき、市川勢はすでに越後を離れ、津川から会津城下に入っていた。

別ルートで会津を目指す同盟軍もいた。七月二十九日の長岡城二度目の落城で越後戦線が崩れた同盟軍は、雨の中、只見に向かった。その中には、ガトリング砲で新政府軍の侵攻を食い止め、一時は同盟軍を優位に導いた長岡藩家老河井継之助もいた。大けがを負い、駕籠で八十里峠に到着した河井は、「八十里腰抜け武士の越す峠」と敗戦の将として無念の思いを詠んだといわれている。八十里越えは、越後と会津の交易の街道として知られるが、一里が十里に感じられるほど険しい山道であることから八十里越えと称されたという。河井のほか長岡、会津、仙台、庄内など奥羽列藩同盟の諸藩一万五千から二万五千人が只見を目指したと言われている。河井は、まもなく亡くなった。

八月二十一日、会津国境の要衝の一つ、母成峠が会津藩兵や大島圭介率いる旧幕府軍、土方歳三率いる新選組などの必死の防戦にもかか





会津田島陣屋跡



会津城西出丸

わらず、新政府軍に破られた。連絡を受けた会津藩は軍議を行い、防  
御態勢を決めた。市川勢のうち百五十人は冬坂峠の守備を命じられ、  
ただちに出発する。隊長は国家老西郷頼母。西郷は直情型で藩主松平  
容保と相性が悪く、意見が対立することも多かったという。容保の京  
都守護職就任に幕府の立場や藩財政を理由に反対し、新政府軍との戦  
争にも否定的だった。五月の白河戦争で大敗した責任を取らされ、閉  
門中の西郷は、なぜか容保に呼び出されて軍議に参加。その席で「こ  
うなったのも藩主以下、重臣の責任。全員切腹すべし」と主張し、不  
評を買った。軍事的に重要ではない冬坂峠に配置されたのは、そのた  
めという見方もある。

新政府軍は、母成峠を破ると猪苗代湖畔を経て二十三日には戸の口  
に至る。会津藩は必死に防戦するが、各地で敗れる。白虎隊も敗れる。  
冬坂峠とは別の市川勢も敗走した。そのなかに十六歳の黒崎大三郎が  
いた。同年代の白虎隊と一時、行動を共にしたことを史談会速記録に  
残している。「白虎隊の一部と合しまして、日向山という所滝沢峠か  
ら十丁ほど隔たった峠がございまして、其方に加わり」と。黒崎はそ  
の後、白虎隊と別れ、銃弾飛び交うなか城下に潜入する。

冬坂峠を準備した市川勢百五十人は、翌八月二十三日、新政府軍が  
城下に向かって進撃しているとの知らせを受けて他の部隊と合流し、  
会津城に入った。城内には、ほかの市川勢二百余人が埋門近くの三の  
丸に在って東北隅を守備していた。前藩主松平容保は、このうち高田  
彦助ら約二十人に西出丸を守らせた。このとき、会津城は精銳の藩兵  
の多くが藩境守備に就いていたため手薄となり、落城の危機にあっ

た。救ったのは市川勢といわれている。押し寄せる敵を撃退、城を守  
り、藩に感謝されたことは存外知られていない。

八月二十五日、会津城周辺を新政府軍に囲まれ、入城できない家老  
内藤介右衛門隊を援護するため、市川勢の二十六人は小田山の山頂に  
登り、おとりとなって新政府軍に向け発砲。敵方の注意を引き付け、  
その間に内藤隊は入城した。これで城内の守備態勢を整えることが可  
能となり、会津藩は改めて持ち場を決めた。市川勢は、西出丸にいた  
高田ら二十人がその西北隅に、三の丸の百八十人余は八幡社から北  
側、埋門までを、また三の丸の南側にある南門の外に位置する延寿寺  
付近を残りの市川勢が白虎隊らと守る。

九月三日、会津藩の飯田大次郎はそれまで分かれて城内の守備につ  
いていた市川勢四百人をまとめて城下に出し、米代四ノ丁の栃木邸を  
屯所に、南町門と花畑門の守備に当たらせた。九月五日、花畑門の西  
側にある河原町門を新政府軍が襲い、会津藩兵だけでは守りきれず、  
市川勢が加勢に駆け付ける。他の部隊も次々に到着し、敵は敗走した。  
連日の戦闘で城内の食糧不足が深刻化。そこで新政府軍の食糧を奪お  
うと九月七日、会津藩家老佐川官兵衛を隊長に朱雀隊や市川勢など千  
人が出撃。各地で新政府軍を打ち負かし、食糧や武器弾薬を奪う。戦  
利品は、次々と城内に運ばれ、人々を喜ばせた。

九月八日、市川勢と会津藩木元隊と長岡藩兵は飯寺村で敵と遭遇。  
このとき濃霧で視界が悪かったこともあり、会津藩兵を追撃してきた  
宇都宮藩兵を市川勢と勘違いした長岡藩兵は、敵陣の中に入ってしま  
った。隊長の家老山本帯刀以下十数人が捕縛され、殺された。残され





片府田の宝寿院の片隅に建つ戦死した市川勢の供養塔



片府田の宝寿院明覚寺

た長岡藩兵は、以後、市川勢と行動を共にし、水戸、銚子と転戦することになる。市川勢のうち、朝比奈、寛の部隊は九月十日、永井野に陣を敷いた。だが、翌日には会津藩隊長佐川官兵衛の命令で会津藩兵とともに高田に至る。目的は、敵と戦うと同時に食糧の確保だった。

九月十六日、会津藩兵と高田から戻った市川勢の朝比奈隊は永井野村南方の山腰を固め、寛隊は東方の高橋川沿いに陣を張り、新政府軍と戦った。一進一退の接戦となったが、やがて会津勢が有利な展開となり、新政府軍は南方の上甲村に敗走した。実は、このなかに水戸藩第二次追討軍の先発隊がいた。小池千太郎と鳥居沖之允の二小隊で、高崎藩兵らが敗走してくると、反撃に転じようと鳥居隊は上甲村から尾岐窪に進軍。小池隊は分かれて小山から仁王を攻撃する。このとき、追討軍の本隊は、塔寺の守備についていた。武田金次郎らは、まだ長岡にいた。鳥居・小池隊の攻撃を受けた会津藩や市川勢は陣地を引き、後退するが、まもなく盛り返して鳥居・小池隊を上甲村に追い返す。その際、小池隊は敵方の武器を奪ったが、そのなかに市川や朝比奈らの兵器や文書数点を発見。市川勢が近くにいることを知り、急ぎ本隊に通報する。

市川勢は、水戸藩追討軍が敵方にいたことは知らずに、会津藩家老の佐川官兵衛の退却指示を受け、永井野村からさらに南方の大内村に行き、十九日には会津田島に至る。そして、三日後の二十二日、会津藩が降伏した。

会津戦争は、約一か月の籠城戦を中心に、死者数千人を出した悲惨な戦いだった。飯盛山での白虎隊の自刃、家老西郷頼母の家族九人の

自害、殺害された兵士を葬ることを許さなかった新政府軍の非道など悲惨な話が数多く残されている。黒崎雄二も史談会速記録で証言している。白虎隊と別れ、会津城に入ろうとして門前払いされたという黒崎は、仲間とはぐれてしまい、砲弾が飛び交うなか、ようやく一人南門そばの東照宮にたどりつく。そこは会津藩の守備範囲だった。黒崎は疲れと気のゆるみから社前で熟睡した。目が覚めると周囲にはたくさん兵士が寝ていた。起こそうとすると、みんな死体だったという。黒崎はこのあと、南門の番人に自分が市川勢の一員だと説明し、城内に入れてもらい、三の丸の守備についていた市川勢と再会した。兄にも会えたが、兄は怪我していた。会津藩降伏が会津田島に伝わったのは二十五日。行き場を失った市川勢は、協議の結果、水戸に戻ることを決め、佐川に別れを告げ、会津藩以外の兵（旧幕府軍、新選組、長岡藩など）とともに直ちに水戸に向けて出発した。

市川勢一行は、九月二十五日に会津田島をたつと、新政府軍の目を避けるように粟生沢から獣道を通り、一気に険しい山越えを敢行、会津藩領を出て板室に入る。新政府軍の略奪行為に反発する田島周辺の農民は農兵隊を組織し、ゲリラ戦を展開していた。とくに粟生沢の農民兵は優秀で、市川勢の山越えに協力した。無事、新政府軍と遭遇せず山越えに成功した市川勢は、百村に宿泊したあと、高林、石上を経て片府田に二十六日夜に到着した。近くには箒川が流れる平坦な地形に、それまで険しい山間部ばかり通行してきた市川勢は気が緩んだ。一行三百人のうち、幹部級三十人が宝寿院に宿泊し、残る二百七十人は付近の民家に分宿した。戦闘態勢ではなかった。一行の動きは、





弘道館正門



赤沼獄舎跡

地元の大田原藩につかまれていた。二十七日未明、大田原、彦根、阿波の三藩兵五百人が三方から攻撃を開始した。市川勢は、朝食の準備をしていたため、応戦する間もなく、銃撃を浴びた。戦闘に慣れていた市川勢は、慌てて態勢を整え、応戦し、激しい銃撃戦となった。白兵戦となると、阿波藩は動かさず、大田原、彦根藩だけが戦った。不意打ちにあった市川勢だが、阿波藩が動かなかったのが幸いし、戦況不利のなかどうにか佐良土方面に脱出できた。しかし、この戦闘で九人が戦死した。いずれも宝寿院墓地に埋葬されたが、弔う者もなく無縁仏となっていた。二十年後の明治二十一年（一八八八）年九月二十七日、これを哀れんだ地元の女性たちが供養塔を建て、慰霊した。佐良土では、黒羽藩が待ち受け、戦闘となったが、夕刻には市川勢が優位となり、箒川を渡り、黒羽藩は追わなかった。この戦闘でも、市川勢は数人が戦死、小さな供養塔が建てられた。

このあと、小川から那珂川を渡り、水戸藩領の馬頭村に入った市川勢は、三月十日に水戸を脱出してから初めて水戸藩兵と衝突。相手は宮村関門を警護する先手同心頭久米鉄之進率いる少数の藩兵だった。戦いは、多勢に無勢。市川勢が勝利する。市川勢は、このあと獄舎を破り、罪人を手勢に加えている。馬頭村に泊まった市川勢は、二十八日、二手に分かれ、主力は水戸を目指すが、一部は小砂から左貫を経て大子に向かう。水戸に向かった市川勢は、鷺子、高部から小野河岸に至る。那珂川を渡ろうとすると、対岸から鉄砲を撃ち込まれて思うように渡れない。最初に自ら櫓をこいで渡ったのは黒崎雄二。砲弾の雨をくぐりぬげ、無事に渡ると敵陣に少数の仲間と斬りこむ。水戸藩

兵は大砲を置いて逃走した。

市川勢が水戸を目指していることを水戸藩が知ったのは、市川勢が領内に入る直前だった。会津城が落城した九月二十二日、城近郊の永井野にいた水戸藩追討軍先発隊のなかで、市川勢の遺留品を見つけたことで、その後の市川勢の動向について「水戸に向かったらしい」「いや仙台方面に逃げたようだ」と風評が分かれていたが、隊長の山口徳之進は水戸の可能性が高いと判断。徒目付渡辺吉太郎を急ぎ水戸に馬で走らせ、二日後に渡辺は藩庁に報告した。予想外の展開に、あわてた水戸藩は、市川勢が通行しそうな場所に藩兵を配置するとともに支藩の宍戸藩、守山藩、松岡藩の中山家などに支援を呼びかけ、守備固めに入った。馬頭村や小野河岸対岸を守備したのも報告を受けたからだろうが、いずれも急なことで少人数のため、市川勢に突破された。小野河岸を渡った市川勢は、二十九日に石塚村の守備隊も撃破した。黒崎雄二は、「石塚で宿をとるとみせまして、その実一泊もさせぬ。それからいよいよ城中に斬り入る内議であります。そのとき死を決して進むのに見苦しい風をして倒れては恥ずかしいから頭の髪を結い、毛の伸びた者は剃るがよろしいというので風俗を改めましたが、如何せん衣服は穢うございます。若し不幸にして目的を果たさずんば、瑞龍山に参つて残らず割腹するという協議であります。それで一層力を得ましてその晩立ちまして水戸城へ参つた様な訳であります」と明治三十三年の史談会速記録に答えている。

石塚から飯富まで来た市川勢は、ここで三隊に分かれ、水戸藩の警護が厳しい金澤坂を避けて那珂川沿いに城下を目指す。一隊は、谷中





八日市場の福善寺

十月一日未明、市川勢は関の声をあげて水戸城に迫った。市川らは城下北側を攻め、北郭見附門を破り、大手門まで迫る。水戸藩兵らは後退し、大手門を閉ざし、城内から銃撃を加え、市川らは反対側の弘道館に立て籠り、応戦した。那珂川に沿った御杉山に陣取った朝比奈弥太郎隊は、急な坂の上にある柵門を目指して駆け上がる。この一隊には旧幕府軍や長岡藩兵もいた。「徳川再興」と書いた大旗を推したてたが、藩内抗争とみて戦闘にはほとんど加わらなかった。水戸藩兵らは、ここを落とされては城内に攻め込まれると必死に防戦。このため、攻めきれずに朝比奈隊は市川らのいる弘道館に向かう。激戦で、市川の長男、主計ほか戦死者が出た。朝比奈隊の若い志水陸一郎は納得できず、市川と朝比奈に「いまなら城内は兵が少ない。兵が集まる前に城内に攻め込むべき」と主張した。無謀と拒否された志水は、同士十数人を連れて御杉山に戻ると、西端の急な城壁をよじ登り、城内に突入。かなりの藩兵を倒すが、次第に追い詰められ、全員殺された。

十月一日(新暦十一月十四日)は、朝から快晴で西風が吹いていた。市川勢が水戸城を攻撃したのは午前四時ごろ。大手門から正面突破を図る一方、北側の御杉山柵門からの突入を図ったが、いずれも守りが固く、城内侵入はできず、主力は藩校弘道館に集まり、大手橋を挟んで水戸藩兵と対峙した。城下に展開し、市川勢の分断を狙い、戦いを挑んだ水戸藩側は戦況が好転せず、午前十時ごろになると市川勢がない城の南側の柵町柵門から城内に戻り、しきりに弘道館に向けて大砲や小銃で撃ちかけた。弘道館側からも負けじと水戸城内に向けて発砲し、その一部は斉昭夫人などの居室付近に着弾した。膠着状態が続



弘道館の正門にはいくつもの銃弾のあとが残っている

の水戸藩共有墓地の坂から本道に出て、下金丁、上金丁、田見小路へ向かった。一隊は、那珂川沿いを進み、ふろの下から大坂を経て、田見小路に。もう一隊は那珂川沿いをさらに進み、水戸城の北側にあった御杉山河岸から城内を狙う。途中、小競り合いがあり、双方に死傷者が出た。九月二十九日夜、谷中から城下に侵攻した市川率いる一隊は、市川家の墓所祇園寺を左手に見ながら、下金丁から上金丁に入る辺りで、水戸藩家老山野辺主水正率いる部隊と激突。修羅場をくりぬけてきた市川隊が優勢となり、山野辺隊は城内に撤退した。市川隊が谷中から本道に出たところで、最後尾にいた側用人荻庄左衛門、勇太郎親子は市川に別れを告げ、市川隊と反対方面に行き、まもなく菩提寺の本行寺に着く。庄左衛門は、そこで母親宛てに遺書を認め、祖父の墓前で自刃。勇太郎も後を追う。遺書には水戸への帰路、左手に銃弾を受けたため皆に遅れ、一人になり身体不自由なため自刃の覚悟をしたとある。もう戦えないし、足手まといにならぬよう自決したと受け取れる内容だ。荻親子が自刃した時期は、市川勢が十月二日に水戸を去るときという説もある。また、自刃の理由を水戸城に入ろうとする市川に対して、墳墓の地を汚すべきでなく、帰順を勧めたが受け入れられなかったからの見方もある。いずれにしても、やっと水戸に帰りながら、自ら死を選んだ荻親子は哀れというほかない。

一方、市川勢が水戸に迫ってきたことで、藩内には恐怖と緊張が広がり、九月二十八日から十月一日にかけて、赤沼の獄にあった市川勢と考えを異にした穏便な諸生党の重臣たちが次々と処刑された。家老天野伊内、若年寄近藤儀太夫ら四十余人が惨殺された。





水戸市の祇園寺には市川勢を含む諸生党の殉難者名を列記した「恩光無辺」の碑がある

闘だったが、双方とも打撃は大きかった。激闘だった。この戦闘で、市川勢、水戸藩とも疲れ果て、十月一日の夜は、どちらも目立った動きを見せなかった。山野辺邸に立て籠った市川勢のうち、旧幕府軍、新選組、長岡藩兵はその夜のうちに水戸を離れた。残った市川勢も戦う余力がなく、翌二日は散発的な戦闘で終わった。同夜、市川勢は山野辺邸に火を放ち、旧幕府軍らの後を追う。歩けない戦傷兵たちは、自刃あるいは介錯してもらい、猛火のなかに散った。また、市川勢と別れた佐々木雲八、野沢藤一郎らは大塚村で自刃して果てた。十月三日夜、玉造で合流した市川勢約百九十人は、夜陰に乗じて霞ヶ浦を船で渡る。高瀬舟二艘、傳馬船一艘だ。行き先は銚子。麻生藩は、水戸藩から市川勢が通過するとの情報を得て警戒していた。まもなく霞ヶ浦で不審な船を発見し、大砲や小銃を陸から放ったが、暗闇もあり見失った。市川勢は、警戒網をくぐりぬけ、牛堀から大利根川を下り、四日夕刻には下総国飯沼村に一艘、隣の松岸村に二艘が着岸、上陸した。そこは高崎藩の支配地で、陣屋があった。市川勢は高崎藩から降伏勧告を受ける。長岡藩兵十一人と旧幕府軍（新選組撃隊、回天隊、純義隊、貫義隊）九十六人は降伏した。ほかに新選組も降伏した。彼らは、銚子から旧幕府軍の軍艦で仲間がいる仙台、函館を目指す考えだったが、軍艦が沈没するなどして銚子に来る軍艦がないと聞かされ、降伏を決めた。皆、東京に送られ、釈放された。市川勢八十人は拒否し、高崎藩との間に緊張が走る。その過程で馬廻組大森金六郎が高崎藩兵の銃弾を受け、死亡した。金六郎は、会津戦争で戦死した家老大森弥三左衛門の弟。偶発的事件で、高崎藩が謝罪し、



松山台の供養塚

く中、本圀寺勢の鈴木縫殿ら藩重臣は、軍議を重ね、午後四時に弘道館の三方から総攻撃を加えることを決めた。一隊は、大手門から弘道館正門を破る。一隊は、柵町柵門を出て弘道館の南柵門に向かう。一隊は、御杉山柵門を出て弘道館の北柵門を目指す。三方から一斉に弘道館に突入し、市川勢を全滅する作戦だ。そして午後四時。大手門が開き、多くの藩兵が関の声をあげて大手橋を渡り、弘道館正門に殺到した。正門脇の通用門を破ると、次々と中へ。そこで二手に分かれ、一手は北側の文館に、一手は南側の武館に進む。文館に向かった監部隊百余人を率いたのは目附鮎沢伊太夫。天狗党の西上に加わり、途中離脱し、備前国から京都に出て、本圀寺勢と帰国した。第一次市川勢追討軍の一員として白河にも出向いた鮎沢だが、敵弾を胸に受けて戦死した。その間に、弘道館の南と北からも藩兵が繰り込み、市川勢は挟撃される格好となり、敵味方が入り乱れての白兵戦となった。各所で激闘が繰り広げられ、市川勢と馬頭で戦い、逃げ帰った久米鉄之助は、汚名挽回と奮戦するが、あえなく戦死した。数に劣る市川勢は、じりじりと後退、西側の訓練場（旧県庁舎）辺りまで追い詰められたところで夕暮れとなり、弘道館北側に位置する山野辺邸（東武館辺り）に総退却する。弘道館の南側に路地を挟んで並ぶ重臣の屋敷は、城内から撃ち込まれた砲弾により火災を発生、折からの西風で市川三左衛門の元屋敷まで七軒が全焼した。この戦闘は、約一時間で終わったが、戦死者は市川勢が九十人、水戸藩が八十七人に上った。戦傷者は水戸藩百三十人、市川勢七十八人。捕縛された市川勢は十一人だった。彼らは、全員処刑された。短時間の戦





発見された黒崎雄二の写真

水戸藩は、市川を全力で探し、明治二年二月二十六日夜、水戸神勢隊が島上邸を囲む。この時の様子が明治二十七年一月と二月の史談会速記録に記されている。答えたのは、天狗党出身の小又慶二郎。

「隊長の村上快助が水戸から来たといわずに尾張からだといって島上に面会した。(水戸と察した)島上は、家で縄をかけないでくれといい、市川を連れてきた。短刀を携えて出てきた市川に腰縄をかけ、家から引き出した。豪雨だったが、傘もささず、ずぶぬれで歩き、水道橋の入墨御門の前まで来たとき、市川に覚えがあるうという、驚いた様子で足が動かなくなった。(中略)市川は痛いということを知



市川家の遺品の中には三左衛門の肖像画のガラス原板がある

戦闘には至らなかった。市川勢が降伏しなかったのは、水戸藩の追討軍に捕まることを恐れたからだろう。

市川勢は、東京に移った朝廷に尊王の気持ちを伝えようと東京を目指すことにした。しかし、八日市場まで来たところで、追討軍が迫ってきたことを知る。市川は、休憩所とした福善寺で一行を前に、東京を目指すことをあきらめ、ここで解散し、それぞれが各地に逃げ延び、新しい時代を生き延びることを提案するが、半数は理解を示したものの、残りは決戦すべしと主張して譲らなかった。市川、朝比奈、寛の三家老は彼らと最期の戦いに挑むことにし、生き抜く道を選んだ同志に、わずかな金子を渡し、別れた。市川らは、八日市場の市街地を焦土にしないよう、市街地から離れた松山村の中台を戦場を選び、移動した。谷津田や林があり、ゲリラ戦にふさわしい場所だった。十月六日、水戸藩追討軍(純真隊)五百人が到着した。一番隊長は尼子扇之助、二番隊長は松延喜之助、三番隊長は河西辰次郎。福善寺に隠れていた市川勢の負傷兵は、追討軍に斬りかかり、怒った追討軍は寺に火を放ち、負傷兵たちは焼死。地元に迷惑をかけまいとした市川らの願いは叶わなかった。

市川勢は西方寺跡に陣を敷き、手前の竜性院近くの山中に五人が待ち伏せ。尼子隊が来ると斬りこんだ。その一人は、豆絞りの鉢巻きをした若者で、騎乗していたが、銃撃されて即死。朝比奈の養子、輜負とみられている。尼子隊は、近くに市川勢がいるとみて、大松庚甲塚辺りに本陣を敷き、午前十一時ごろ攻撃を開始した。市川勢の十数人は、多勢に無勢と知りながら、必死の形相で応戦し、尼子隊の中に斬

りこんだ。気後れした尼子隊は、馬印を捨てて逃げ出す。隊長の尼子は叱咤、われに返った隊員らはただちに反攻に転じ、午後一時には勝敗が決した。静かになった山中には市川勢の屍が点々とし、追討軍は八日市場に戻っていった。朝比奈、寛も討ち死にし、市川勢は壊滅した。ただ、市川は、獅子奮迅の戦いぶりをみせ、傷を負ったが、生への執着をみせ、草場に隠れ、谷津田を走り、戦場を抜けると高野村の大木佐内を訪ねる。大木は剣客仲間、市川を自宅に匿い、夜陰に乗じて右手に深手を負った市川を近くの人目につかぬ小屋に連れていき、傷の手当てをしてくれた。食事も運んでくれた。しばらく養生した市川だが、小屋にだけかいるとこのうわさが流れ、市川は、東京に逃れる。大木は、水戸に連行され、拷問を受けるが口を割らず、帰される。市川は、東京の宝徳寺に嫁いだ三女を頼ったが、いずれ知れると青山百人町の剣客島上源兵衛宅に身を寄せる。島上も大木同様、剣友だ。



らない。打たれても叩かれても一向平気で、責めがすんでから好きなものを食わしてやるというと、鰻飯が食いたいといい、食わせると縛られながらむしゃむしゃ食った」

水戸に送られ、四月三日、上下町を引き回しのうえ長岡原の刑場で史上まれな逆さ磔により処刑された。その寸前「勝負はこれから」と絶叫したという話がある。時に五十三歳。墓は水戸の祇園寺にある。この日、長岡原では市川勢の佐藤万衛門ら四人も磔で処刑されたほか、市川勢ではないが、仙台で降伏した吉野英臣ら諸生党五人も斬首された。

市川の妻、幾志は長男の妻とともに赤沼の獄につながれていたが、のちに出獄を許され、武田金次郎の目を気にしながら百一歳の天寿をまっとうした。幾志は、後日「夫はフランスに逃げるつもりで準備していましたが、外国船の出航が一日遅れたために捕まった」と述べている。市川家には、市川が海外生活のために独習したというドイツ語、化学、数学などの原稿が残っているほか、藩政を担っていた時に重臣に宛てた手紙も残っている。遺品の中には辞世の歌もある。幕末から明治にかけて藩内抗争を戦いぬいた市川は、万感の思いを込めて詠んだのだろう。

君ゆえにすつる命はおしまねど忠が不忠になるぞ悲しき

市川三左衛門の処刑で市川勢は壊滅した。三月十日に水戸を脱出したとき五百人いた仲間は、八日市場で最後の決戦を挑んだとき四十人に減っていた。北越戦争、会津戦争、弘道館の戦い、そして松山中台

の戦いで多くが戦死した。途中で戦病死した者もいた。そのなかに別

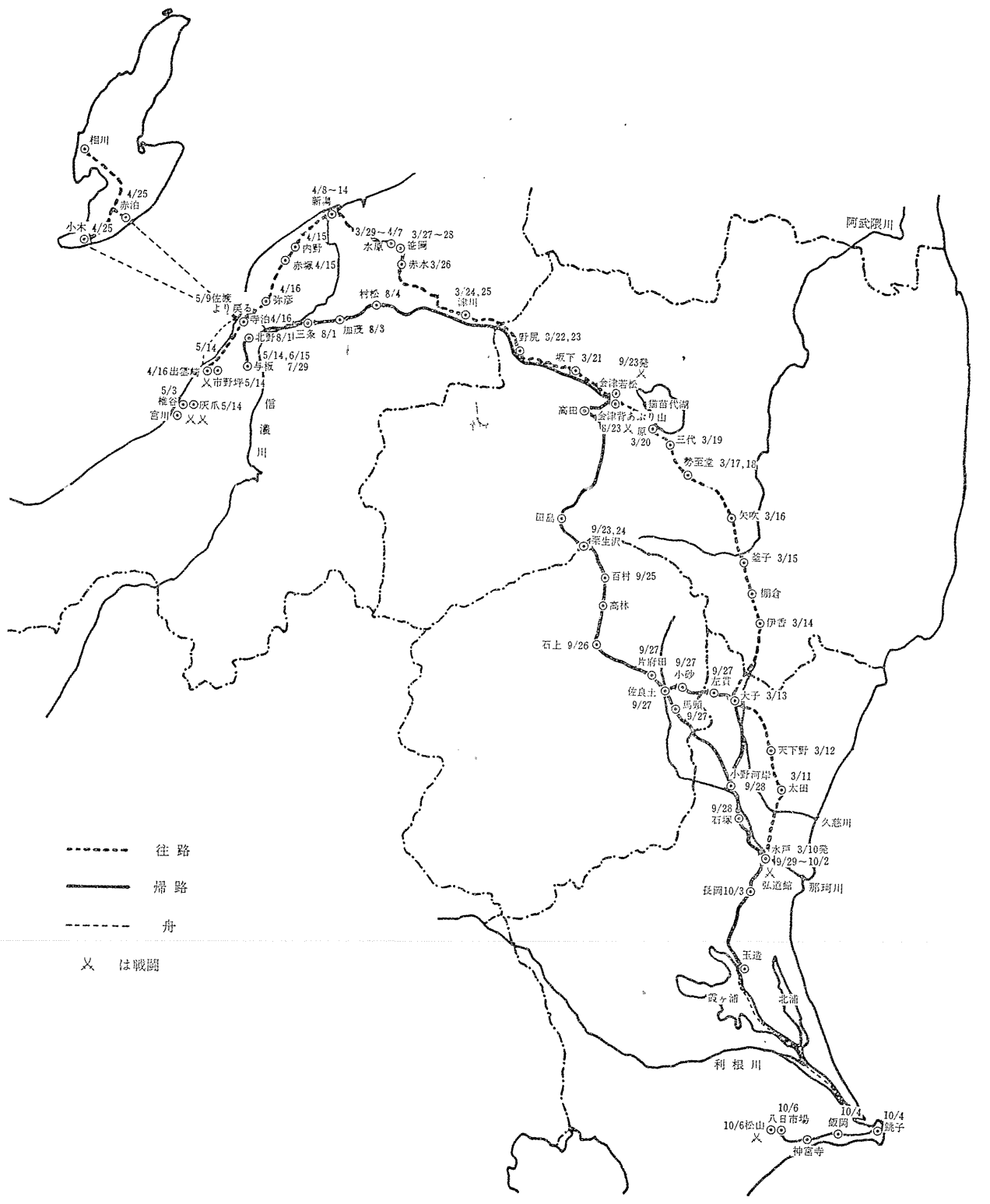
行動したグループがいたことも分かってきた。天狗党に「鬼」と恐れられた伊藤辰之助の部隊二十数人だ。彼らは、会津城を目指し、桑名藩兵らと行動を共にしたが、城下に新政府軍があふれ、城に入ることが困難と判断すると、仙台を目指した。途中、庄内藩の部隊と出会い、庄内藩に同行するよう勧められ、庄内藩に入った。新政府軍と戦ったが、会津城が落城し、会津藩が降伏すると、庄内藩も降伏した。その際、藩主酒井公は、新政府軍から匿っている他藩の兵士を引き渡すよう求められるが、そのような者はいないと断り、桑名藩兵と伊藤隊に護衛をつけて東京に逃がす。このとき、伊藤は負傷していたため、別行動をとり、配下の者と二人で喜多方に隠れた。そこで養生し、傷が癒えると、伊藤は一人、東京に出た。ぶらぶらしていると、警視庁から警察官にならないかと誘いを受ける。仕事は、薩摩に下野した西郷隆盛に謀反の動きがあり、それに連動して東京でも決起する話が進んでいるので、彼らの同志となって密偵を行えというもの。かつて新政府軍の指揮官だった西郷は仇敵であり、伊藤はこの話に乗った。だが、西郷を慕う者たちの話を聞いているうちに同情し、仲間になってしまい、結局、逮捕され、実刑をうけてしまった。

さきに紹介した黒崎大三郎（雄二）のその後も、触れておこう。黒崎は、兄藤右衛門とともに八日市場を離れ、東京に逃れる。兄は足に重傷を負っていたため、隠れ家を出ることができず、養生に専念したが、大三郎は各地を回り、明治五年暮れになって古里大子に戻ると、次兄と弟に再会し、家族の無事を確認する。翌年すぐに東京に帰り、

兄に報告。その足で横浜に行き、船で渡米する。二十二歳のときだ。

霊巖島に潜伏していた兄は、まもなく傷が悪化し亡くなった。黒崎は、渡航費用をどう工面したのか、なぜアメリカを選んだのか。わからない。その後、イギリスに渡った黒崎は、ロンドンから大子の母親に自分の写真を郵送した。二十八歳だった。写真が大子に残っていた。明治十七年、黒崎は浄土真宗の高僧北畠道龍の通訳として帰国する。ロンドン時代に官費留学の化学者高峰譲吉と知り合い、一足早く帰国した高峰は、黒崎が帰国するとすぐに訪ね、一緒に酒造会社を興そうと持ち掛ける。資金を黒崎が、技術を高峰が、という企画だった。黒崎は、了解したが、まもなく高峰が政府の命令でアメリカの万博を視察しなければなくなり、この話は立ち消えとなった。頼末を高峰は自伝に記している。黒崎は、その後、神戸に行き、イギリスに米穀を輸出する貿易会社を設立し、弟も参加する。これが成功したかどうか不明、黒崎は東京に戻る。そして、史談会のインタビューを受けた。





市川勢行動経路図

### 第三節 ほかの諸生党の動向

(茨城県唯一の現役陸軍大将になった男は諸生党の子孫)

水戸藩に「二田」ありと称された側用人藤田東湖と執政戸田忠太夫。二人は、斉昭の側近として藩政を支えたが、二人とも安政の大地震で圧死した。戸田の長男、忠則は穩健な諸生党だったが、市川と考えが合わず、市川を排斥しようとして逆に謹慎させられ、慶応元年一月に幽閉され、半年後に獄死した。父親をはじめ歴代の戸田家の墓所は、酒門の水戸藩共有墓地にあるが、忠則の墓はない。忠則は、近くの常照寺の墓地の片隅にひっそりと眠っている。忠則の弟、藤三郎(道守)も諸生党に属し、天狗諸生の戦いでは、軍功をあげている。ただ、兄同様、穩健な考えを持ち、市川らが会津に向かった時は、同行せずに水戸に残った。ところが、本圀寺勢が帰国すると、穩健な諸生党に対しても厳しい弾圧を加え、暗殺、投獄される者が続出し、藤三郎は水戸を離れることを決意する。本人だけが逃れる例が多いなか、藤三郎は妻と幼い子供二人を連れて一家で逃れることにした。その理由は定かでないが、家族に類が及ぶことを恐れ、ともに逃げる道を選んだものと思われる。

行き先は、東北方面だった。市川勢が会津藩を頼ったことは知っていたが、市川勢の後を追うことにはためらいがあった藤三郎は、天狗諸生の戦いするとき、幕府軍に参加した福島藩を頼ることにし、水戸藩を出るが、幼い子供連れの旅は難渋を極めた。路銀も少なく、福島藩に入ったところは、ぼろを身にまとい、食うに困る極貧の状態だった。現在の福島市の中心部から少し西側にある荒井村に辿りついたときは、

物乞いの家族だったという。様子を見かねた村民が納屋で暮らすことを許し、藤三郎と妻に教養があったことから近所の子供たちに読み書きを教えて糊口をしのいだという。これが村の評判となり、水戸から来た武士の家族への同情もあったのか、村民は新政府軍から彼らを隠し、明治の世を迎えることができた。藤三郎は、地元の荒井村の小学校の教員となり、間もなく妻も教員となり、生活は落ち着いてきた。藤三郎は、明治九年から十年間、荒井村小学校の校長を務めた。妻の鳴井マツも同じ学校の教員だったが、明治十四年に病死した。三十七歳だった。墓は、荒井にあり、教え子たちが建てた。墓石には教え子たちの名が刻まれている。マツは、彼らに慕われていたのだろう。慶応二年生まれの長男慎之介は、二歳の時、乳飲み子の妹と親子四人で水戸を離れ、辛酸をなめて育ったが、明治十二年に十四歳で隣村の佐倉村の小学校で教員として働き始めるが、翌年には退職し、陸軍教導団歩兵大隊に入隊する。優秀な少年だった慎之介は、田舎の小学校教員では先がないと判断したのだろうか。両親も軍隊ならば将来があると思いい、見送ったのだろう。

藤三郎は、妻に先立たれ、息子に去られ、娘も地元の裕福な農家に嫁ぎ、一人になり思うところがあったのか、明治二十年に校長を退職すると、茨城に帰る。ただ、古里水戸には帰らず、海道道辺りを彷徨したようだ。そして、四年後客死した。独り寂しい死だった。慎之介は、陸軍で頭角を現し、明治十九年には陸軍士官学校に入学し、同二十二年少尉に任官し、その後、陸軍大学に進み、明治二十八年に菊池家の養子となる。養子となるまでの経緯を紹介する。慎之介



の祖父は、水戸藩執政を勤めた戸田忠太夫で、その長男は諸生党穩健派の忠則。市川に逆らい、獄死したが、その子忠正は、明治政府のもとで判事として活躍する。慎之介とは従兄にあたる。かれが、一時、慎之介の養父となり、菊池家の娘房子と結婚する。房子の祖父、菊池右仲は水戸八幡宮の宮司だった。水戸藩十代藩主慶篤が上洛する際、右仲は神官隊の一員として随行し、京都に行く。本圀寺勢に入るが、香川敬三らと土佐陸援隊に移り、活動の場を広げていく。名も芳野昇太郎と改め、明治政府にあつては判事を務める。そこで、戸田忠正と知り合った可能性がある。芳野は、前姓の菊池を残そうと、二女のぶに婿をとらせ、菊池姓を名乗らせる。そして、のぶの二女房子が慎之介を婿に迎え、慎之介は菊池慎之介となった。このとき慎之介は慎之助と改名した。かつて敵対した本圀寺勢と諸生党の子孫が不思議な縁で結ばれた訳だ。

慎之助は、日清戦争を経て、陸軍大学を明治三十年に卒業。日露戦争のときは第四軍管理部長から副官となり出征した。大正二年に少将で歩兵第五旅団長、人事局長など務め、朝鮮軍司令官のとき、大正十二年に大将に昇進。翌年、軍事参議官兼東京警備司令官に転じる。大正十五年から亡くなる昭和二年まで教育総監兼軍事参議官を務め、六十二歳で病没し、青山霊園に眠る。墓には、父戸田藤二郎道守の名が最初に刻まれている。

(寺門勢を率いた寺門登一郎の長男彦太郎)

元治元年の天狗諸生の戦いでは、藩士だけでなく、領内の農民も天狗諸生に分かれて戦った。県北地方では、額田を拠点とした額田北郷

の組頭寺門登一郎が率いる寺門勢が諸生党に属して天狗党と戦った。寺門勢は、武士たちに負けない戦いぶり、勇猛な部隊として天狗党に恐れられる存在だった。諸生党が藩政を支配すると、登一郎らは厚遇されるが、その期間は短かった。幕府が崩壊し、王政復古すると、敗者だった本圀寺勢や天狗党が復権、水戸藩は尊王攘夷を唱えた彼らの手に渡った。登一郎は市川勢に加わり、水戸を出ると、会津、越後に渡る。ただ、越後で市川勢と別れ、一人江戸に行く。その経緯は不明だ。そして、江戸で捕縛され、水戸に連れ戻された登一郎は古里で処刑された。

この時、長男の彦太郎は十三歳。類が家族に及ぶことを心配した親戚が、登一郎と懇意にしていた越後長岡の知人を頼るよう手配してくれた。少年の彦太郎は、わずかの手荷物をもって額田を去り、長岡に向かった。長岡に到着したときは、すでに新政府軍によって長岡藩は敗れ、城下は焼け野原だった。訪ねた知人も不明で、途方に暮れた彦太郎は付近をさまようばかりだった。救いの手を差し伸べてくれた関谷村の庄屋が、知り合いの医師佐藤玄信を紹介してくれたのが幸いした。佐藤は、遠い水戸から十三歳の少年が訪ねてきたことに感じ入り、自宅で書生として働き、学ぶことを認めてくれた。彦太郎は、その恩に報いようと懸命に働き、医学を学んだ。佐藤は、明治九年に「腸室抹期論」を著した優秀な医者だった。彼は、彦太郎の才能を評価し、書生として四年間手元で学ばせたあと、東京の済生学舎で勉強するよう手配してくれた。佐藤や近所の庄屋たちの温かい支援を得て、彦太郎は東京に出、本格的な医学を学ぶことができた。その一方で関谷村

の金物屋が娘を彦太郎の嫁にしてほしいと庄屋に依頼し、娘は東京の伯爵家に行儀見習いに出て、彦太郎と交際を始める。まもなく二人は結婚する。彦太郎は、明治二十二年に医術開業前期試験に合格。その六年後、後期試験に合格した彦太郎は、晴れて開業医の資格を得ることができた。明治三十年、彦太郎は東京で開業することができた。

額田の実家は、伯母や弟が再興し、士族に復権していた。彦太郎も二人のおかげで戸籍を水戸藩士族寺門登一郎長男として得ることができた。戸籍を得ることで、開業医となることもできた。開業してまもなく、彦太郎は里心が出て、嫁を連れて額田に帰った。彦太郎が医者になったことに地元は喜び、歓迎してくれたが、実家はすでに弟が主人となっていただけに、少し気まずい雰囲気があったようだ。とくに彦太郎の嫁は、生活習慣も違う土地になじめないこともあり、居心地が悪かったのだろう。二人は、短期間で東京に帰った。

その後、二人は嫁の実家を頼って新潟県中条町に転居開業した。安定した生活を過ごした彦太郎は、少し離れた柴橋村の小学校の校医を続け、地域医療に貢献した。晩年、額田に父登一郎の墓を建て、供養したそうだ。

(四十八年ぶりの兄弟再会)

市川勢に属したなかに佐々木治兵衛、猶太郎親子がいた。越後の北越戦争を新政府軍と戦った二人だが、会津城に入るころは混乱していたため、行動を共にすることができなかった。父親は会津城に入るこ

横山伝蔵隊に加わり、城外で戦ったが、新政府軍に包囲され、城内に戻ることができず、横山隊と別れ、単身、火原峠に出たところで桑名藩の一隊に合流した。彼らは、藩主がいる仙台を目指すが、途中で庄内藩の銃隊頭中村七郎右衛門の部隊と遭遇し、庄内行きを勧められる。桑名藩兵と猶太郎は中村隊に合流し、庄内藩に入り、清川口の守備にあたり、新政府軍を撃退した。十七歳の若者だった。まもなく市川勢の伊藤辰之助率いる二十数人も合流し、庄内藩とともに新政府軍との戦闘に尽くしたが、会津藩が降伏すると、庄内藩も追うように降伏した。

新政府軍は、庄内藩に対して市川勢や桑名藩兵の引き渡しを求めたが、庄内藩主の酒井公は、彼らを地方に匿い、新政府軍には匿っていないと応じなかった。しかし、新政府軍が藩内に入り、探し始めると、酒井公は彼らを東京に護衛をつけて逃がす。そのなかで、年少の猶太郎と伊藤要蔵は庄内藩士の養子となることを勧められ、現地に残った。猶太郎は、庄内藩家老水野内蔵之丞の計らいで、表向き負傷後、亡くなり、大督寺に葬られたことにされ、水野利勝の名をもらう。新政府軍は猶太郎が水野家の家族と思っていた。ところが、どこで事実が知れたか不明だが、水戸の佐々木家に猶太郎が鶴岡で生きているといううわさが流れ、猶太郎の母親は急ぎ鶴岡に旅立ち、庄内藩に猶太郎の消息を尋ねた。事実を話すことのできない庄内藩は、猶太郎が亡くなり、墓が大督寺にあると告げるしかなかった。そのことを知らされた猶太郎は、母親に会えぬ悲しみを必死にこらえたという。落胆した母親は、水戸に帰るとまもない明治三年五月に没した。



猶太郎は、明治五年に今村家の養子となり、名を猶造と改め、戸主となった。ときに二十一歳。わずか四年の間に佐々木猶太郎から水野利勝、今村猶造と名乗り、維新を乗り切った。庄内藩への恩義を胸に、猶造は働いたが、望郷の思いは年とともに強まる。父の思いを知る猶造の子猶次は、六十四歳になる父親の願いを叶えたいと大正三年、東京で大正博覧会が開催されていることを理由に、二人で上京。その際、水戸に行こうとの話になっていた。七月十七日、二人は水戸に着いた。猶造には、十歳離れた弟捨吉がいた。猶造は、菩提寺の信願寺を訪ねた。佐々木捨吉の行方は不明だった。翌日、偶然に捨吉が萩原姓を名乗っていることをつきとめ、自宅を探し出し、訪問した。捨吉はいた。実に四十七年ぶり、奇跡の再会だった。会津で父治兵衛が戦死したと、母親がわざわざ鶴岡まで訪ねてくれたのに会えなかったこと、庄内藩が親身になって匿い、助けてくれたことなど猶造の話は捨吉は泣きながら聞き入った。兄弟の再会に立ち会った猶次の感激も大きかった。

捨吉は、大正九年に鶴岡に行き、兄弟は再会した。その二年後に猶造は七十二歳で亡くなり、捨吉も同年六十二歳で亡くなった。

(生きていた今村孝本)

諸生党が藩政を抑えた水戸藩で側用人を務めた能吏、今村喜左衛門(孝本)は、市川勢でも活躍したが、市川三左衛門の言に従い、八日市場の決戦を回避。東京から遠州(静岡)に向かう。水戸の祇園寺にある恩光無辺碑には、諸生党の戦没者名が刻まれているが、そこに今村の名もある。だが、今村は生きていた。今村は、遠州光明山に隠棲し、

水戸に帰ると情け容赦なく仲間とともに殺戮を続けた。あまりの非道を見かねた尊攘派の鎮派は、これに抗議し、藩に金次郎らの行為を止めさせるよう求めたが、市川勢と一線を画し、水戸にとどまっていた諸生党の多くは、身の危険を感じ、六月には水戸を脱出する。内藤もその一人だ。内藤は美濃部又三郎の二男として生まれ、弘化三年、二十歳の時に内藤家を継いだ。家禄二百石の中士の身分だった。弘道館で会沢正志斎に学び、二十九歳で水戸藩の軍事を総括する軍用掛となる。その後も昇進し、御用調役、弘道館教授頭取など歴任するが、保守派にあって鈴木石見守や市川三左衛門とは考えが違い、獄につながれることもあった。内藤が回想録として残した「悔慚録」によれば「余は怯(よわ)き政府(水戸藩)の下に居て生を求むることを欲せず、いでや朝敵に加わりて幕府の為に快く打死せんこそ、彼暴人等(金次郎ら)が凶鋒にかかりて犬死せんにはまさりぬべし」といつて六月三日に水戸を出た。内藤には三人の兄弟がいたが、兄の美濃部又五郎(側用人)は獄中で斬られ、弟の塩津四郎左衛門(先手物頭)も内藤が脱出後に殺された。太田から折橋に着いた頃は、内藤は二十人余の仲間と会津を目指していた。そこで吉野英臣のグループと合流し、奥州須賀川に入った。総勢五、六十人になっていたという。「悔慚録」は、ここで一隊を吉野に預け、一人会津に向かったと述べている。会津城に入った内藤は、会津藩の軍師的な役割を与えられ、白河城攻撃に加わり、会津城に在って新政府軍と戦ったと書いているが、それを裏付ける史料は見つからない。その後、会津を出た内藤は、米沢に逃れ、そこも危険と思うと仙台に潜む。だが、仙台藩も危ういと知

付近の子供たちに読み書きを教え、穏やかな日を過ごしていたが、明治三年、中泉郡役所物産方に出頭を求められた。今村が、水戸藩諸生党の一員として北越、会津、水戸などで新政府軍と戦った歴戦の勇士と郡役所は知っていた。その力量を買って今村に難題の解決を依頼した。難題は、江戸時代まで続いた人手に頼った大井川の渡しを船に切り替えること。そして猛反発した荒くれ人足七百人を説得することだった。役所の役人には手に負えず、胆力のある今村に白羽の矢が立った。事情を聞いた今井は、現地に向き、様子を探り、明治三年五月、掛塚港から夜陰に紛れて船三隻を曳き、川尻から大井川をさかのぼり、横岡まで乗り入れることに成功する。その後、船十三艘、船頭五十人を指揮して大井川通船を実現させた。猛反発していた川越人足も通船事業に転職させ、難題を見事に解決してみせた。彼の力量は役所の話題となり、明治五年の学制発布により小学校が建設されると、役所は今村に教員になることを勧める。今村は固辞したが、役所はあきらめず説得。学校は神座村の応開舎という。今村は役所の熱意に負けて受けることにした。そのために水戸に帰り、母親や兄弟と再会し、復籍の手続きをとったうえ、茨城県では生活できないことを聞かされ、静岡県土族となる。戸籍も神座村に移す。静岡に戻った今村は、教員や役所の職員など歴任し、明治十九年に周智郡山科村戸長に就任。森町町長を経て明治二十七年から十年間、島田町助役を務め、大正九年に七十七歳で没した。

(東大教授になった内藤耻叟)

天狗党の生き残り、武田金次郎は仇敵諸生党を江戸で次々と殺し、

ると、さらに北上。舞草村(岩手県一関市)の下駄職人鈴木留五郎方に身を寄せること一年余、明治二年には下野国の知人の紹介で山形県職員になっている。鈴木宅を去る前に、内藤は、自らの陣羽織に「徳川旧臣 大草与左衛門正直 行年四十二」と書いて形見として与えたという。大草は、変名であり、四十二歳は明治元年にあたる。山形県職員の時、知人の名を使い、栃木県平民湯沢三四郎正直と名乗っていた。

その後、政府に知られ、明治六年司法省に出頭を命じられるが、とくに罪を問われることもなく、翌年大蔵省に出仕、同十年に東京府庁に転じて一等属に昇進する。旧制中学で教えた後、十九年には文科大学(東京大学の前身)教授となる。六十歳になっていた。弘道館で学び、教えた経歴が生きたといえよう。やがて近世史学の権威と評価されるが、その著「徳川十五代史」第一編に「徳川氏旧臣 内藤耻叟識時二年六十六」と記しているが、それまで長く変名を使うことを余儀なくされた旧水戸藩に対して、堂々と名乗り出た瞬間であり、徳川氏旧臣と記したことも、鈴木留五郎に与えた陣羽織と同様、内藤の心境を表したものでいえよう。「悔慚録」には、かつて同志を預けた吉野英臣に関して、仙台藩を頼って青根温泉に潜伏中、欺かれて水戸からの捕り手に引き渡され、水戸で市川らと処刑された経緯を紹介している。無念だったのだろう。

(諸生党のスポンサー薄井友衛門)

諸生党を支えたのは藩士だけではない。結城派といわれた時期は、安政初期に制裁を受けたなかに鷺子村の郷土薄井宗休、同友衛門と伴



部、同七衛門、同宗七、馬頭村郷士星小野衛門、同北条斧四郎、大子村郷士益子民部左衛門をはじめ額田北郷村百姓登一郎、小中村庄屋佐川民三郎ら十五人が揚屋入りなど処分を受けた。彼らはまもなく追罰される。郷士薄井宗休（昌敏、百姓に）、郷士薄井友衛門（宗休の継嗣昌脩、百姓に）、郷士薄井七左衛門（宗休の子昌範、百姓に）、郷士薄井宗七（宗休の子、百姓に）、郷士星小野衛門（郷士召放、武器欠所）、郷士北条斧四郎（百姓に）、郷士益子民部左衛門（百姓へ）、高部村郷士岡山次郎衛門（隠居）、大宮村郷士立原伝十（郷士召放、武器欠所）、上松沢村郷士小室平次衛門（郷士召放、村慎）、大子村郷士飯村清蔵（隠居）など。結城と親密な関係にあった郷士たちだ。

元治元年の天狗諸生の戦いでは、結城派が復活し、戦列に加わりともに、新たに農民組織として鯉淵村の鯉淵勢、河和田村の河和田勢が大きな勢力を誇り、天狗党と対峙した。ほかに薄井友衛門隊、寺門登一郎隊、益子隊、黒崎隊など各地で天狗党と戦い、武功を挙げていく。市川勢に参加した小中村郷士佐川民四郎は会津で捕まり、明治四年に獄死した。大子村からは益子民部左衛門親子、黒崎藤右衛門兄弟、飯村紀七郎が加わり、最後まで戦い、戦死した。

薄井一族は、なかでも豪商として多額の献金を結城派時代から行い、諸生党に尽くした。水戸藩が献金郷士を復活させた文政期に二千万を献金し、百五十石取りの郷士となる。隣の烏山藩の台所をすべて賄ったのも薄井家といわれている。砂金採取と紙問屋で財を築いたといわれている。市川勢に加わった十六代友衛門、七左衛門、宗七のなかで当主友衛門は最後の将軍慶喜が静岡に去るとき同行し、長男の部

も同道したという。二男謹之進は会津で戦ったあと函館五稜郭の戦いで戦死。三男忠太郎は戦病死した。四男武次郎は旗本梅津家の養子となり、五稜郭で戦った。宗七は日光で切腹して果てた。宗七の三男春吉は市川三左衛門の養子となり、弘道館の戦いで戦死したという。十六代友衛門には娘もいた。としては、江戸の豪商加藤平八に嫁ぎ、長男伝太郎は家業を継がず、芸の世界に入り、二男二女ができたが、そのうち三人は芸能界に進んだ。沢村国太郎、沢村貞子、加東大介。沢村の子は長門裕之、津川雅彦だ。

#### 第四節 函館出兵と廃藩置県

十代水戸藩主慶篤は、水戸に到着してまもない慶応四年四月五日に死去する。三十七歳だった。慶篤は、長男鉄之允（篤敬）を世継ぎにすることを決めていたが、重臣らは鉄之允が幼少だったことや、藩政が定まらない時期であったため、政府には慶篤の喪を秘し、欧州に留学中の鉄之允の叔父で清水家の養子となっていた昭武を十一代藩主にするをお願いした。同年十一月三日に昭武が帰国すると、すぐに慶篤の名をもって昭武を世継ぎにすることを正式に政府に要請、許可された。二十歳だった。若き藩主にとって戊辰戦争に対応することや、藩内抗争で疲弊した藩政を立て直すことは容易ではなかったが、当面の課題は軍事優先の藩編成に取り組むことだった。

新政府の求めに応じて、水戸藩は明治二年に藩政改革を行う。政務局、軍事局、司農局の設置だ。これに伴い、役職名も変更された。参政（旧若年寄）、監察（旧目付）、行人（旧使番）、内史局長（旧奥祐

筆頭取）、政務局幹事（旧御用調役）、司農局長（勘定奉行）、軍事局幹事（軍事御用掛）など。政務局総裁は鈴木縫殿と野中三五郎、同局参政は岡部七十郎と松平蔵之允、同局幹事は野村彝之助と原田誠之介、軍事局総裁は山口徳之進と三木左大夫、同幹事は長谷川作十郎と酒泉彦太郎、司農局総括は尾崎豊後、同幹事は矢野唯之允と石河竹之介など。本圀寺勢が政権を掌握したことがわかる。

奥羽列藩同盟が崩壊し、新政府軍の攻撃対象は、蝦夷に渡った旧幕府軍の拠点函館五稜郭だった。戊辰戦争に決着をつける時が迫っていた。水戸藩に函館出兵の命が下ったのは、明治元年十一月だった。その後、藩は翌年一月十五日を出兵の日と決めたが、市川勢との戦いの二か月後であり、藩政は疲弊し、財政も逼迫していた。このため、明治政府に出費を願って、ようやく二月十五日、水戸藩は二百人余を出兵させることができた。三月八日、水戸藩兵は、他藩の兵ら計二百人余と東京から大阪丸に乗船し、三日後に青森港に到着する。約一か月滞在した後、四月十五日に青森港を出港し、翌日に江差に上陸する。

水戸藩兵は二手に分かれ、一隊は福島を経て新政府軍の指令により当別村から敵正面に向かう部隊に加わり、矢不來台場を攻撃した。台場の上から旧幕府軍は猛攻を仕掛け、水戸藩の軽鋭隊副長の村田弥一郎、渡辺吉太郎らが土塁まで迫ったが銃弾に倒れた。宮川壘の攻撃では、小監察の原隼之介が戦死した。この日の攻撃で水戸藩の戦傷者は十三人にのぼった。もう一隊は、江差に残り、山側から五稜郭を見張り、敗走する旧幕府軍を追って峠下村で大砲四門を奪い、五月三日は

有川村の守備にあたり、新選組や彰義隊と激突し、彼らを追って大川村まで進撃した。十一日には福山・徳山藩隊とともに赤川、神山の台場を攻撃し、逃げる旧幕府軍を追って五稜郭に迫った。台場の戦闘で水戸藩兵二人が戦死した。十七日、五稜郭の旧幕府軍が降伏。戊辰戦争は終結した。水戸藩の一隊は、降伏した旧幕府軍の千人余の護送を担当し、残る一隊は占領した五稜郭の受け取りを担当し、現地に残った。手続きが終了し、新政府軍に属する諸藩が引き上げるなか、水戸藩兵は六月二日に豊安丸で帰京の途に就き、八日東京に到着。水戸に戻ったのは十五日、二百二十人が出兵し、戦死者九人、負傷者十九人を出した。

戊辰戦争が終わり、明治政府は新しい国家体制の構築に着手する。まず行ったのが版籍奉還だ。水戸藩は、藩制改革にあたり、政府に「水戸は元来僻地で頑固の国柄であり、かつ五年來荒廃をきわめ、いまだ人心一定しておらず、このとき二百年來の旧習を一新するとすれば、趣意を了解せざる者が反発するかも知れない。その節には必然的に武力をもって鎮圧せねばならないので了承されたい」と願った。この当時、新政府の密偵が藩内の状況を政府に報告している。そこには「藩内は混雑を極めてい。原因は天狗組政権が誕生してから諸生の処刑が続いており、明治元年以來明治二年七月ごろまで約三百人余に達しているのも一因だ」と指摘しているように、新時代に入ってから水戸では、天狗党による諸生党への復讐が続き、民心が安定しないことがわかる。

維新のとき、茨城県域には水戸藩のほか土浦、笠間、結城、石岡、



下館など十四の藩と天領、旗本領、大名の飛び地など領地が入り乱れて存在したが、明治政府は天領、旗本領を没収し、明治四年七月に廃藩置県を実施する。ただ、これをもって中央集権国家が確立したというわけではなく、このとき各藩はそのままの名称で県としたので、水戸藩も水戸県となり、藩政が県政に引き継がれたのが実態だ。そして、同年十一月十三日になって従来の藩名もなくなり、茨城県が誕生する。とはいえ、政治の実情は、旧態依然の状態であり、困った明治政府は「難治県」の茨城に剛腕で知られる大蔵大丞渡辺清に鎮台兵を従えさせて、水戸の混乱收拾を図ろうとした。明治五年七月のことだ。渡辺が水戸にきて数日後、水戸城が放火され、大半が焼失する事件が起きた。渡辺と政府に対する反抗と思われる。犯人は、天狗党の三木左大夫、大竹与兵衛ら百人にのぼるとみられ、検挙され、取り調べを受けたが、刑務所に入ることなく釈放された。政治的配慮があったとみられるが、釈然としない結論だった。その後、茨城県域は茨城県、新治県、印旛県の三県に分かれていたが、明治八年に整理統合され、現在の茨城県域がほぼ確定した。県庁は水戸に置かれ、県の長官には旧新治県権令の中山信安が権令として就任した。中山は、かつて市川勢が佐渡奉行所に軍資金を求めて訪ねたとき、断った奉行代理であり、その後、新政府軍に隠していた金塊を渡し、新政府の役人となった男だ。中山はどのような気持ちで水戸にやってきたのだろうか。

## あとがき

幕末維新時に、水戸藩は多くの人材を失いました。元治元年には天狗党に関わる人々が、慶応四年（明治元年）には諸生党に関わる人々が、それぞれ自分たちの信じる大義に従い、戦い、散っていきました。それも残念ながら時代の大きな潮流とは離れたところでエネルギーを使い、結果として新しい時代に水戸藩が脚光を浴びる舞台は用意されなかったのです。史実は、それを示しています。その全体を臆せず俯瞰し、偏らず、受けとめ、語り継ぎ、新しい時代に活かしていくことを考えていきたいと思えます。

執筆にあたり、利用した主な参考・引用文献は、「水戸市中巻」(四) (五)、「市川勢の軌跡」、「覚書幕末の水戸藩」、「戊辰戦史」、「会津戊辰戦史」、「茨城人のルーツ」、「茨城県史研究九九号」、「水戸の斎昭」など。執筆の機会を与えてくださった水戸藩士殉難百五十年記念事業実行委員会に感謝します。(市村)

元水戸市市議会議長高橋丈夫議員は、水戸藩士殉難百五十年記念事業ならびに水戸殉難者恩光碑保存会の事業に大いに御尽力下さいました。平成三十年十二月十九日、志なかばにして御逝去なされました。ここに慎んで御冥福をお祈り申し上げます。(岡見)

### 埋もれし人々に光を 水戸藩士殉難百五十年記念誌

平成31年2月1日

発行 水戸藩士殉難百五十年記念事業実行委員会  
委員長 岡見 円礼

029-252-3445

印刷 富士オフセット印刷